
おかしな魔眼？と異なる世界

めみょうすずはく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おかしな魔眼？と異なる世界

【Nコード】

N7224P

【作者名】

めみょうすずはく

【あらすじ】

名前以外極平凡な普通の高校生。主人公、色波しきなみ葉家よづかは、なんとなくという理由で異世界に転生させられる。能力をもらったが、いろいろと駄目な気がする能力で…。タイトル変更しました。（元『駄菓子屋と異世界』）

作者は初めての作品です。そのため、いろいろとグダグダ、駄文だったりします。それでも大丈夫な方は、どうぞ。

プロローグ（前書き）

作者初めての作品の為、駄文でグダグダで読みづらいたと思いますが、どうぞ、ご了承ください。

プロローグ

目覚まし時計が鳴り響き、起床時間をしらせる。

それを気にすることもなく、この部屋の主、色波葉家は、安らかに寝息をたて、幸せそうな表情で布団にくるまり、ぐっすりと眠っている。

だが、目覚まし時計の音は時間とともに、どんどん大きくなる。

さすがにうるさかったのか、もぞもぞと腕を伸ばして、目覚まし時計の音を止め、また眠る。いや、正確には眠ろうとした。

しかし、今日は平日であり、葉家は学生である。当然、これが何を意味するかというと…

「……もう、こんな時間だと!？」

遅刻、というものである。

朝ご飯を食べる暇も無く、大慌てで、すぐに制服に着替える。

「くそっ！起こせよあのアホ弟が！」

髪を整える　　のは、学校にいつてからでいいか。

「いつてきまーす！」

といいつつ、靴を履いて家を出る。

くだらなく寝ていた数分前の自分を恨みながら、とにかく走り続ける。

そして数分後、ようやく、校門が見えてきたところで…

急に、意識を失った。

「そんな訳で、あなたには転生してもらいます。」

目の前のふんぞり返ったゴスロリの少女が偉そうに喋る、正直うざい。正直言わなくてもうざい。

どうやら自分は神（笑）の玩具になれ、と言われているらしい。

「…なぜ自分を？」

「んー、なんとなくですかね」

こんな適当な理由で自分は殺されたらしい。なんという理不尽さ。さて、気づいている人もいるだろうが自分は意識を失ったあと、こんなところにいたのだ。

んで、なんだかよく分からないうちにかつてに話を進められている。どうやら自分は転生させられるらしい。もちろん拒否権なし。

「えーと、次は…能力をつけるか。」

「一応危険な世界だと思うので適当に能力つけときますんで」

「…普通そこは能力を選ばせると思うのだが」

「そこらへんは気にしない方向で！」

「使い方とかは飛ばしてから教えるのでよろしくです。」

「それ以前に自分は転生する事を了承して」

最後まで言うことができずに、自分の意識は暗転した。

…知らない空だ

木々が生い茂った森の中で、色波葉家はテンプレ通りの台詞を言うとして…やめた。

葉の隙間から漏れでてる光が暖かく、ついうとうとしてしまう。しかし、一応ここは異世界で、森の中。危険な動物などもでてくるかもしれない。

眠気をこらえながらとりあえず起き上がる。

そして、ポケットに何かが入っていることがわかった。

特にきにもすることもなくポケットの紙をとり出し、書いてある文字を読む。

“ なんとか転生できたみたいですね。よかった、よかった。

あ、あなたに与えた能力の説明をしますよ。

一つ目は、魔眼「駄菓子眼」ですね。左目で「うまい棒」を作れます。ちなみに味が選べますよ！。そして右目で「うまい棒」に能力をつけます。ま、能力といっても投げたら燃えるとかその程度ですけどね。

二つ目は頭を良くしてあげましたよ。おめでとう。瞬間記憶とか並列思考とかですね。

三つ目は…まだ秘密です。

まあ、頑張つてこの世界での生活をエンジョイしてくださいね。ピーえす、間違えて体いろいろいじくっちゃった。てへ

あなたの神様より”

「…あれ？なんだろう、殺意しか湧いてこない」

能力もあまりにも戦闘向きじゃないし。

こんな能力より無限の 製とか王 財宝とかの能力が欲しかった。

それより一つ気になる文があつたんだが…

体をいじくった？へ？なにやってくれてんの？あの野郎。そういう冗談は…え？冗談じゃない？だから冗談はやめようぜ？な？

なんて願いは虚しく、残念ながら160ほどあつた身長は110cmほどに縮み、

黒かった髪の毛も真っ白になり、

目も、両目黒だったのが右目が白で左目が黒のオッドアイ……？にな
っていた。

……なんだこの気持ち悪い色は。髪はまだ許そう。一足早く白髪に
なったと思えばいいからな。

だけどさ？目の色。これは流石にない？いや、わりと本気で気
持ち悪いのだが。

しばらくブツブツと神（自称）に恨み言を言ったあと、悩んでいて
もしかたがない、と思いなおし、とりあえずは能力を試す事にする。

「……まずは、うまい棒をつくって」

左目に意識を集中させ、能力を発動させる。すると、左目から歯車
のようなものの立体映像が浮かび上がる。

味……ランダム

場所……右手

という文字がさらに頭に浮かび上がり、右手にうまい棒のサラダ味
が出現する。

「……とりあえず、作ることは成功。次は能力か」

そして、能力を発動させる為に、右目に意識を集中させる。

右目から、魔法陣のような立体映像が浮かび上がり、頭の中に

能力……時速25kmを超えると発火

対象……右手のうまい棒サラダ味

という文字が浮かび上がり、右手のうまい棒から光が発せられるが、すぐに収まる。

特に外見に変化は無い。袋を開けて一口食べる。普通のうまい棒サラダ味だ。そして、能力を試すために投げてみる。

ゴオオオオオオッ！！という激しい音の割にあまり大きくない炎を出しながらうまい棒は進んでゆく。

当然、激しく燃えてるわけではないが、炎はでてる為、木々に着火し、どんどん炎は大きくなってゆく。

「…まじかよ」

色波葉家は自業自得という形で、異世界初の命の危機にさらされるのだった。

キャラクター設定

名前 しきなみ 色波 ようか 葉家

性別 女

年齢 16歳

身長 前：156・3cm

現：107・6cm

体重 前：44・8kg

現：13・4kg

容姿 (以前) 黒髪黒目で、肩までかかるほど髪を伸ばしている。

(現在) 白い髪に、右目は白、左目は黒のオッドアイで、肩ぐらゐまで髪を伸ばしてる。

性格 のん気でマイペース

能力

「駄菓子眼」

左目で「うまい棒」を作りだして、右目で「うまい棒」に能力をつける。

能力を発動させる際、左目から歯車、右目からは魔法陣のような立体映像が浮かび上がったたり浮かび上がらなかったりする。

そこらへんは任意。でも浮かび上がった時のほうが能力やらは強くなりそうな気がするらしい。

また、この能力は制限をつけることで性能を上げることができる。

（例として、『なにかにぶつかる発火する能力』と『なにかに一定以上の速度でぶつかる発火する能力』とでは、だいたいスライムとスライムベスぐらいの差があるということ）

「並列思考／瞬間記憶」

並列思考が使えて、瞬間的に物事を記憶できる上、絶対に忘れないどころかほとんどん覚えて記憶の中で並列思考が勝手に応用したりして、知識が増えてゆく。でも全くと言っていいほど使われてない。

「限界破棄」

限界を無くす能力。限界が無くなっている為、成長率もあがっている。

おまけとして、上がる能力を絞れたりできる。（例えば防御力のみに絞ると、筋トレしても筋力は上がらずに防御力が上がる）

ついでに筋力を全く無くしても速さがあるなら特に走ることとかに支障はないらしい。

最終手段というか裏技として、なにかを削って何かを増やすことができる。

（十三話では筋力を犠牲に速さを、筋力がこれ以降伸びる可能性を犠牲にして防御力を増加している）

ステータス（十三話以降）

筋力：10キログラムを持てるか怪しいところ

防御力：数十万トンの衝撃を受けて無傷

素早さ：音速の約3倍

体力：音速と同じ速度で10時間は走れる

補足

戦い方は相手の攻撃を受け、その攻撃の衝撃や斬撃を体に溜め込み、それを相手に放つ。

どれたけ溜め込めておけるかは不明。

わりと目が当たるところはダメ。髪の毛が白いから。

白目ってというのは白黒反転した目。

実はステータスは常上昇している。筋力以外。

限界突破ではなく“破棄”だから。

ちなみに5歳くらいの体系にしたのは作者の不注意や予期しないところとかで恋愛要素を出さないためだったりする。

この作品に恋愛は出しません、なぜなら作者に文才が無いから。

名前	ラダ・クルズール
性別	男
年齢	13?歳
身長	183.7cm
体重	68.9kg

容姿 短めのふわつとした黒い髪を逆立てた、少し釣りめで細めの黒い目をしている。

性格 気まぐれ、

能力 どんな所でも生活できる能力？

二つ名 超速回転

補足

年齢、能力は自称のため真偽は不明。

世界にたった3人しかいないギルドランクEXの一人。
使用武器は秘密。そのうち出す予定。

第一話 ご都合主義？なにそれおいしいの？

ある部屋の一室。宝石が大量についている服を着た、妙に偉そうな態度の青年がいた。

実際偉いのだろう、その青年は大量の書類にむかい休むことなく手を動かし続けている。

静かな空間に、カリカリと書類にサインする音だけが響き、一段落した所で、休憩でもしようと、窓の外を見る。

そして、燃えている森を見て絶句するのと、扉が大きく開けられ、荒々しく息をついている兵士が、報告をするのが同時だった。

「大変です！森に不法侵入をしている者が出現、炎を自在に操っているところから、魔女の類かとおもわれます！」

「あ、危なかった…」

ギリギリ炎が近くにくる前に、うまい棒を大量に作り出し、炎を消すという能力を付与して、ばらまかなかつたら死んでいたかもしれないというのに、本人は全く取り乱した様子を見せていなかった。…これが、魔法を使いこなした魔女と勘違いされた要因なのだが。

（さて、まずは近くに村とか街とかあるといいんだが…、む？）

のんびりと考え事をしていると、ガシャガシャと、鎧の音がいくつも聞こえた為、思考を中断し、意識を向ける。村とかへの道とか教えてもらえれば…、とか思いながら、話かけようとした所で…

「動くな魔女め！以前は油断していたが、次こそはそうはいかんぞ！いくら炎を完全に操るとしても、この人数差では勝てまい！おとなしく拘束されよ！」

魔女扱いかよ。…あれ？もしかして魔女狩りの時代？

H A H A H A、落ち着け、とりあえず落ち着け、とりあえずは自分の行動の後の事を考える。

1、おとなしく拘束される。

却下、魔女狩りの時代なら拷問とか処刑とかされるだろう

2、立ち向かう

却下、こんなものすごく訓練された戦士たち（総勢40人位）に日本人が一人すら倒せる訳が無い

3、逃走

…保留、一番いいとは思いますが逃げ切れるかわからない。

4、能力を駆使して逃げる

…んー、これが安全で生存確率が最も高いかな？

と、いうわけで

「捕まってたまるか!!」

うまい棒を作成、煙幕の能力を付与して逃げる！

「く、また魔法か！皆の者！魔女が逃げるぞ！捕まえろ！」

（やっかいなことになったな…）

さつきから煙玉（うまい棒）を投げながら逃げているが、全然距離が変わったような気がしない。

むしろ近づいてきている上、人数が増えている気までする。

鎧を着ているくせに息もきらず、ペースも変わらず。むしろこっちが息切れしている。

（…ペース上がってね？）

正直ヤバいと感じたのか、うまい棒に付与する能力を閃光と炸裂音に変更する。

投げつけると、激しい炸裂音と閃光に辺りは包まれる。当然、その間も逃げる…のだが

「魔女はまだいる！全員追いかけるオ！決して見逃すなよ！」

（え、なにこいつら）

諦める気配が感じられない。それ以前に捕まえようとしている気持ちがどんどんふくれあがっていつている気さえする。

（そろそろ体力きついんだが、現代日本人なめんなコノヤロー）

心ではそんな軽口が叩けても、体は正直で、どんどんペースが下がってくる。

ペースが下がっている事に気付いた兵士たちがどんどんペースを上げる。

「魔女がペースを落としたぞ！今がチャンスだ！」

当然ペースを上げられては逃げられる訳もない。最後に意地で大量の閃光玉（うまい棒）を投げつけるが、兵士たちは閃光や音にひるむこともなく、葉家を捕獲した。

（現代日本人にはよく逃げ伸びた方だよな。ていうか…普通に都合主義とかで捕まらないんじゃないかねーの？）

なんて思いも虚しく、

「諸君！ようやく魔女を捕まえたぞ！」

「「「「「ワアアアアア！……！！」「」「」「」

しっかりと捕獲されたのであった。

第二話 牢屋の中で…（前書き）

今回も駄文ですが、どうぞお付き合いお願いします。

第二話 牢屋の中で…

「そうか、魔女を捕まえたか、ククク」

宝石を大量に着けた青年、この国、ラダトスの王は、魔女を捕獲したという情報を聞き、笑みを見せる。

魔女とは、強い力や特殊な能力を持つ種族であり、普通の人間は当然ながら、訓練を重ねた戦闘のエキスパートでさえかなわないという強さをもつ。

悪魔と契約した者も魔女と言われるが、その魔女と魔女の種族は、全く違うものとして扱われている。

しかし、このように強い力をもつ魔女の種族は、たとえ捕まえても、ほとんどは処刑して殺してしまう。

それは、魔女の能力を利用しようとしても、裏切られたり、協力されないことや、自分勝手に、自己中心のため、非常に扱いづらいからである。

たまに、自分勝手では無い（力に溺れてない）魔女がいるが、その魔女達も人間に協力する事は無い。

ただ、魔女は強い力を持つためか、魔女を処刑した国は、武力が高いとされ、また王も、魔女を捕まえることのできるほどの王などということで、民衆からの支持も上がる。

「クク、これで捕まえた魔女は3人、明日処刑を行い、余の国はさらに豊かになる、おい、下がってよいぞ」

「はっ」

兵士がいなくなったため、王しかない職務室で、王の笑い声だけが響いていた。

「おいおい、牢屋かよ」

疲労で眠っていた葉家は目を覚ました。
目をこすりながら頭を覚醒させる。

（拷問とかいやだなー）

なんてことをのんきに思いながら辺りを確認する。

（ふむ、前は…鉄格子だな。右…壁、ものすごく固そうな。後ろ…
2 m位先に壁だね。んで左は…黒髪を逆立てた青年と頭の辺りがアレなおっさんつと。

…えー、なんだよ。自分一人の牢屋じゃねえのかよー）

と思いつつ、のろのろとベッドの脇に腰掛ける。

じつとこちらを見ている黒髪の青年とバーコ…おっさんに、とりあえず話かけることにする。

「えーつと、初めまして？」

「ん、ああ、初めましてだ」

と、黒髪の青年

「こちらこそ初めまして、お嬢ちゃん」

と、おっさん。

「そーいやー嬢ちゃん、名前なんていうんだ？」

名前分からねーと面倒だしな、と笑いながら言う黒髪の青年。

葉家の方もそっぴいえば忘れてたな…などと思いながら自己紹介をすることにする。

「ああ、色波葉家だ。しきなみようか」

ちなみに、葉家の方が名前な。」

と、葉家が名前を言うと、むう…などと言いながら考えはじめた。

「葉家、ヨウカ、ねえ、聞いたことねえ名前だな。なあヨウカ、お前どこの出身だ？」

(あ…、どこ出身って言われると考えてなかった)

地名など全然分らない為、葉家はどうかごまかせる答えを考えはじめた。

しかし、少しすると、

「ああ、答えたくねーならいいんだ。
おっと、俺の事教えんの忘れてたな。俺の名前はラダ・クルズール
ってんだ。よろしくな。」

つつても明日には処刑されるんだろうけどな、と楽しそうに笑いながら話す。

対する葉家も、拷問とかなくてよかったーなどとほっとしている。そんなところで今まで空気があったおっさんが話しかけてきた。

「私の名前はルワン・レンドラストだ。

…ところで二人ともに提案があるのだが…」

「なんだ？ルワン………さん？ていうか忘れてた」

「なんだよ、てかいたのかよ」

「え、あ、うん、いたんだよ。私の提案、聞いてもらえるかな？」

忘れられていたことにショックを受けていたようになっていたルワンだが、気を取り直して話しかける。

「この牢屋から…脱出してみないかい？」

ルワンは言った。自分にいい作があると。

「なんかこういうのって、自分が思うに裏切られたりするよな」

「ああ、同感だな」

「…二人共酷くないかい？」

「安心しろルワン。自分は別に元からあんた信用してないから。」

「右に同じくだな。」

「……………」

第二話 牢屋の中で…（後書き）

ちなみにメインキャラはラダ（黒髪の青年）の方、ルワン（おっさん）はモブ…の予定です。

第三話 逃走の開始（前書き）

勢いで書き始めからグダグダは上、ネタが…
駄文ですが、お付き合いお願いします。

第三話 逃走の開始

「牢屋から、脱出してみないかい？」

なにこともなかったかのように言うルワン。そのルワンを葉家とラダは冷めた目で見る。

その沈黙を勘違いしたのか、ルワンは話を続ける。

「君達は、どうして牢屋に入れられたんだい？」

「知らん。道聞こうとしたら追いかけられて捕まった。」

「俺は町で買い物してたら捕まったな」

その返答にルワンは真剣な顔をして話を続ける。

「私は、森で木の実をとっていたら捕まった。

…さて、理不尽だとは思わないかい？」

ただ、道を聞こうとしただけ。

ただ、町で買い物をしていただけ。

ただ、森で木の実を取っていただけ。

ただそれだけで、処刑されるんだよ？

…逃げたいと思わないかい？」

まるで、断る訳が無いと思っているような顔をして二人に問いかける。

さあ、さあ、と了承の返事を待っている。
ふいに、葉家がルワンに話しかけた。

「ん？なんで自分達に話しかけたんだ？
普通に一人で逃げれば、三人よりかはばれにくいだろっし、裏切られたりするんじゃないのか？」

「そーいやーそーだな。やっぱリアレか？さっきヨウカが話したように俺達を囷に逃げるとかか？」

続いてラダもルワンに問いかける。

「いやいや、そんな事はないさ。
ただ、脱出するには君達二人の力が必要なんだ。
たとえばラダくん。」

「くんとかキモいんだが…、なんだ？」

「二人共私に酷くないかい？
たとえば君はどんな能力を持っているんだい？
ちなみに私は物を元に戻す能力だ。修復能力とでも思ってくれればいい。」

「俺は、どんな所でも生活できる能力だが？」

「…え？」

まるで違う能力を想定していたかのようにルワンは驚く。しかし、すぐに気を取り直して話を続ける。

「えっと、ヨウ力ちゃんはどんな能力だい？」

「ちゃんとか…、まあいいや、自分の能力は」

一旦区切って少し考える。

（うまい棒を作りだして能力を付ける能力。長いな。ついでにごまかせる感じのなにかいいのは…）

「…（うまい棒の）粉を撒き散らす能力だ」

（嘘は言っていない…よな？）

ものすごく微妙な顔をしながらルワンが葉家に聞く。

「…その粉ってどんな物なんだい？」

「食べられて、いろんな味があるけど腹は膨れない。目に入ると痛い。」

「……………」

訳の分からない能力だったのか、ルワンは考えこむ。
そして、何かに気づいたかのように、葉家に聞く。

「めくらしとかには…」

「使えないな。実際効いてなかったし。」

まるで二人の能力が予想外だったかのように、啞然とするルワン。
しかし、すぐに気を取り直し、話を続ける。

「たとえば、私の能力で穴を修復させて穴を開けても、どこかで隠れたりしなければならぬ時どこでも生活できる君がいると、生活できるんだよ。」

そして、退屈な時は、粉を撒き散らす能力で、娯楽としてそれらを食べればいい。

そんなわけで三人の力が必要なんだよ。」

（自分、いらなくね？）

なんて思ったが、あえて言わない事にする。

さあ、脱出する準備をしよう、などと言っているルワンに、了承してねーよな？などと思いつながらベッドから立ち上がる。

「それじゃあ、いこうか！」

そんなルワンの言葉と共に、壁が崩れ始めた。

「大変です！王！」

大声を出しながら、慌てたように王がいる職務室に入りこんだ兵士に、王は驚く。

「なんだ？余は今考え事をしておるのだ。用があるならさつさと申せ。」

さつきまで高笑いしていた時とは全く違うように、威厳たつぷりに言う。

その威厳に兵士は気押されるが、それよりも大事な用があると思い直し、王にひざまずき、話す。

「はっ！申し訳ありません！牢屋に入れていた魔女三名、牢屋から逃げだしておりました！牢屋の壁に穴が開いてあったことから、非常に強い能力を持つ魔女がいると思われます！」

その言葉に、王は大きく目を見開く。

牢屋の壁は、この世界で最も硬く、さらに全く脆くないといわれる物質「オルレリアン」をつかったのだ。

あまりの硬さ故に、加工すらもほぼ不可能とされ、できる限り平らな物を集めて壁としたのだ。しかし、それに穴を開けるほど強力な能力など……。そこまで考えて、王は慌てる。そのように強い能力を

もつ魔女など、けっして生かしてはおけない、と。

実際はルワンの能力で、砂だったころ（元）に戻したただけだが。

「いそげ！いそいで魔女どもを捕まえるのだ！決して逃がすな！捕まえた者には褒美をやる！さっさと行ってこい！」

「はっ！了解しました！」

兵士が出て行つた扉を忌々しげに睨みつけながら、職務に戻る王であつた。

第四話 全力で逃走中！（前書き）

あれ…？戦闘にするつもりはなかったんだけどな。
戦闘といっても一方的な攻撃ですけど。

今回もグダグダですが、どうぞよろしくお願いします。

第四話 全力で逃走中！

「ここが二階で助かったな」

森の中を走りながら、そう呟く。まだ追ってくる兵士たちはいない。だが、いつ来るか分からない為、常に走り続けなければならない。だからこそ。

「この身長がうぜエ…」

神に勝手に身長を変えられ、そうとう小さくなっている歩幅はどうしようもない。

ちなみに他の二人は、バラバラになった方が見つかったても大丈夫…？ということ、三手にわかれている。

森に降りてから大量の「色波葉家」の気配を持つうまい棒をつくってばらまいているが、閃光なども効かなかったため、そっちの方に釣られるか分からない。

「はっ、はっ、…んあ？」

開けた場所に来た、と思ったら…

「遅かったね、ヨウカちゃん」

何故かわかれたはずのルワンがいた。

胡散臭い笑みを浮かべながらこちらに歩いてくる。

その手には…ロングソードが抱えられている。

そして、葉家の近くに來た瞬間。

「ふっ」

「はっ」

葉家にロングソードが振るわれる。

全力で葉家は後ろに飛び、その少し前をロングソードが通り過ぎる。
そしてそのロングソードで斬られた前髪が数本落ちる。

（おいおい、自分が考えたこいつ裏切り案、まさかの正解か？
はっ、笑えねーな。こっちは走り続けて疲れてるんだよ）

「くくっ、何故こんな事したか分からないって顔をしているね。」

（思ってたええし、してるつもりもねえよ。）

話している間は、攻撃してくる気は感じられない。

念のため、人形ひとがたの者を3秒足止めする能力を持つうまい棒と、剣ロングソードを受け止める、または受け流す能力を持つうまい棒を大量につくる。

「クク、でも、理由は簡単、君を足止めして、兵士が来るのを待つ。兵士が来たら私は君を能力を使って赤ん坊（元）の筋力に戻す。そうしたら、君は逃げれない。そして私は逃げる。

追ってくる者も筋力を元に戻して、ね。ただ一つ、問題があつてね。

能力を使うには、対象に触れる、または30時間以上20m以内にいさせなきゃいけないんだ。

だから、君をこうやって足止めしなきゃいけないんだよ。ククツ。

私の逃走のために生け贄になってくれよ？

クツ、クククツ、ハーハツハツハツ、ハーッハツハツハツ」

笑い出すと同時にこちらへ駆けてくるルワン。

振るわれるロングソードをうまい棒で受け流し、突き出される手のひらをかがんでかわす。

そして後ろへ跳び、蹴りをかわすついでに足止め能力のうまい棒を投げる。

それをルワンがロングソードで斬る。

「チツ、こんな小さな女の子いじめて楽しいかよ？おっさん」

話しながらも足は休めず、ルワンの周りを走りながらうまい棒を投げつつ話す。

投げられるうまい棒をかわし、ロングソードで斬りながらルワンも話す。

「いやいや、楽しくはないさ。

ただ、私のための生け贄になってくれる君の表情が苦痛に歪む時は、ゾクゾクするだろうね。

クク、考えたら興奮してきたよ。」

（変態だ！）

なんて話している間も兵士はどんどん近づいてきてる筈。

そう思った葉家は、走りだし、先に進もうとするが、ルワンが自分より足が速いと思うため進めない。

（くっ、殺し合いなんざしたことない日本人にそんなもの（ロングソード）向けるなよ！）

そう考えている時、ビュオツと風を切る音がする。

うまい棒を取り出し、それを防ぐが、

「グッ」

直撃は防いだが、左肩に走る激痛。

見ると、ロングソードが肩に刺さっている。

そして目の前には、走ってくるルワン。

そのパンチを横に転がってかわし、ロングソードはあまり深く刺さっていないかったのか、地面に落ちる。

すぐさま何故かポケットに入っていたハンカチで肩を縛り止血する。

そして3分間気配を消す能力のうまい棒と、姿を消す能力のうまい棒、そして臭いを消す能力のうまい棒を作りだし、能力を使う。ついでに、大量の閃光の能力を持つうまい棒や、大量の煙をだす能力のうまい棒、大きな音を出す能力のうまい棒を大量にばらまく。

「んなつ！」

激しい光と音により、混乱するルクスのすきについて、森の出口の方へと駆け出す。

血が転々と地面につき、目印のようになっているが、さきほど使用した、うまい棒の能力によって、少しの間は見えなくなっているの
で、今はきにせず走る。

一応、煙や閃光や音は、触れることができない（・・・・・・・・・・
・）ため、時間稼ぎにはなるだろう。

（にしても、走ってたおかげか、左肩はある程度痛みは少ないな。）

なんて思いながら、体力の限界を超えているであろうその体に鞭を打って走る。

静かな森のため、さっきの音はずいぶんと目立っただろう。

後ろから、ルワンの焦り声と兵士の歓声が聞こえてくる。

ただ、兵士の歓声が聞こえる、ということは、兵士がもう近くに來
ているということだろう。けして休むことは出来ない。

ただただ走り続ける。

どれほど走ったのだろうか、すでに辺りは暗くなり、星が見えてくる。

兵士の声も鎧の音も聞こえず、自分の足音と荒い息だけが聞こえてくる。

（…もうすでに限界超えてるんだが、
どこか小屋か何かないかな。）

そんな事を思いながら、ようやく、森を抜けたことに気づく。
森を抜けたと気付いた安心感によって、そのまま、葉家は意識を失った。

第四話 全力で逃走中！（後書き）

敵date

ルワン・レンドラスト（故人）

身長 162cm

体重 57kg

性別 男

能力 何かを元に戻す

補足

バーコードヘアーのおっさん。茶色の髪に青い目、太った体をしている。ロリコン。

元々裏切るつもりで二人に脱出を呼びかけたが、目論みは失敗し、牢屋に入れられ処刑された。

能力は物を元に戻すという弱いようにみえて強力な能力。

ただし、20m以内のもの限定であり、さらに、触れてから発動しなくてはならない。

触れないで発動させる場合は、通算30時間以上20m以内にいろこと。

発動条件を満たすのは面倒だが、満たせてしまえば非常に強い能力である。

第五話 しゅぎょー（前書き）

本当に自分の文才の無さに絶望した。

今回もグダグダで駄文ですがお付き合いお願いします。

第五話 しゅぎょー

小鳥がさえずり、木の枝に止まり、木の実をついばむ。

また、川を辿っていくと、きれいな湖に出る。

その湖を迂回し、森を抜け、しばらく歩くと、木でできた小屋が見えてくる。

その小屋の外で立ち、向かいあっている二人の青年と少女。

…一人な青年。黒髪を逆立て、黒い目を細めて相手と対峙している。名前はラダ・クルズール。この小屋の所有者であり、魔女という種族の一人である。

…もう一人は少女。白い髪を肩まで伸ばし、めんどくさそうな黒目をさらにめんどくさそうに歪め、白目の方を大きく開け、相手と対峙している。

名前は色波葉家^{しなみよつか}。少し特殊な能力を持つ人間にして、神の気まぐれによりこの世界に来て、魔女の種族となった少女である。

何故この二人が対峙しているかは、少し前にさかのぼる。

「知らない天井だ。」

そんなセリフを言いながら、この言葉がようやく言えたことに少し嬉くなる。

初めのころは天井すら無い森の中だったし、その次は牢屋であつた上、いろいろあつたので言えなかったのだ。けして忘れてた訳ではない。

そんなことよりと前の状況を思いだす。

待ち伏せされ、ロングソードを肩に刺され、逃げて。

「あれ？思いだしたら自分って相手^{ルウン}に怪我すらさせてない？」

なんて思いながら少し凹む。結局自分はただの日本人なんだ、チート能力なんて無いんだ、と。

まあ、そんなことを考えていてもしょうがないし、体を起こそうとする。

「つう…」

左肩に痛みがはしるが、気にせず我慢して起きあがり、辺りを確認する。

自分が今まで寝ていたのは、質素なベッド。

近くには小さな丸テーブルと椅子が置いてあり、その先に扉がある。テーブルの上にパンが置いてあつたので、有り難く頂いた。…自分のためじゃないかも知れないが。

とりあえずある程度お腹は膨れたし、家の探索（という名の泥棒、勇者だつてしてるじゃないか）をすることにする。

そして立ち上がったところで、扉が開き、黒髪を逆立てた青年が出てくる。

…その青年は牢屋で出会った、青年、ラダ・クルズールであった。

「…なんでこんなところにいんの？」

「ここは俺の家みたいなもんだからなー」

「なるほど、臭いの元はお前か」

「…ひどくね？」

冗談だ、という葉家に対し、俺はまだ十三なんだからなー、とふてくされたように言うラダ。

気になる発言があつたが、葉家はスルーすることにする。

「まあでも、大丈夫かヨウカ、ボロボロで小屋の前に倒れてた時は驚いたぜ？」

「んー、まあ、ちょっと貧血ぎみできついが大丈夫だと思う。」

パン食つて…るな、まあ、ちょっと寝ときゃー大丈夫だと、ころころ笑いながら話す。

そして思いだしたように、ラダは聞く。

「そーいやー、なんで怪我してたんだ？」

「ん？ふふつ、ああ、そうだな。自分の考えが当たった、てことだ。」

「え？なんだ？まさかの裏切り？」

「うん、いやゝ死ぬかと思った。」

アハハハハハ、と二人で笑う。

ひとしきり笑ったあと、ラダが言う。

「くく、でも、あいつ（ルワン）から逃げきったってことは基礎能力はあるってことだろ？」

「ん？え？は？」

突然のラダの言葉に、混乱する葉家。

ラダは葉家のそんな様子を気にせず、話を続ける。

「どうだ？俺が修行つけてやるよ。」

（修行か…、面倒くさいな。）

「いや、別にいらな」ピロリロリン」「

そこまで言ったところで、訳の分からない音楽が、頭の中に鳴り響く。

タイミング悪すぎだろ…、と思っていると…

「三つ目の能力が判明、三つ目の能力は限界の突破。限界を取り除きます。」

また、限界を取り除いた影響により、成長率も上昇しています。

また、どんな修行をしても、一つ以外を上げず、その一点のみを修行した、という事もできます。

…つまりは振り分けるポイントを一つに絞る、という感じです。説明は以上です。」

「修行を受けさせてください。」

「え、なんだその心変わり。」

「…気にするな」

まあ、そんな訳で修行をすることになったので、こうして二人で対峙している。

「まあ、修行内容は極めて簡単、っても初めだしな。

俺の攻撃を全てよける。受け止めたりは無しな。それができたら次のステップだ。

目標は…半年ぐらいかな？手加減するから頑張れよ？」

手をブラブラとさせながらラダが話す。

そして、右足を前に出し、前かがみになって腕をだらんとたおす。

「…一年ぐらいでもきつそうなんだが。」

葉家の方も、準備運動をして、目を閉じ、精神を集中させる。

「じゃあ、いくぜ？」

ラダのその一言により、葉家は目を大きく開かせ、ラダは膝を曲げる。

「よい、ドン、だ」

第五話 しゅぎょー（後書き）

主人公の現在のステータス

高 EX<SSS<SS<S<A<F 低

また、+、-、などは、一つでそのランクの3分の1

（S - - - || A C + + + || B）

筋力 F + +（小学校高学年程度）

体力 E（中学生程度、走り回ったため少しupしている。）

耐久 E（剣系の刺す攻撃にある程度の耐性）

敏捷 E +（50mを7〜8秒で走る程度）

魔力 F - - -（皆無、頑張れば増やせる…よね？）

幸運 E（極普通の運。小吉程度）

第六話 修行と魔法の説明（前書き）

ここの魔法は、杖は魔法の補助程度のもの。

自転車という補助輪です。

初めて魔法を使う場合は杖があると便利ですが、強くなると、無い方が強い魔法が出せるようになる、という設定です。

あと、魔力は回復はするけど、増やすことは不可能、ということにしています。

…アレ？主人公魔力なし？

第六話 修行と魔法の説明

「じゃあ、いくぜ？」

そう言った瞬間、ラダの姿がぶれる。

ぶれたと認識した瞬間、腹部に強い衝撃がくる。

「ガッ」

体がくの字に曲がったところを、背骨への追撃。

さらにその体制のまま脳天への踵落としがくる。

そしてまた背中、腹、後頭部、すね、胸、脳天などと次々と攻撃が来る。

必死に倒れないように足を出し、ふんばるが、さらにふくらはぎと太ももへの攻撃を受け転倒。

うつぶせに倒れてから、背中を軽く踏まれ、攻撃が止まる。

「よし、俺の勝ち！」

「いつ…かい、し、ね…」

このぐらいかわせる様になれよー、と笑うラダ。

そのラダを睨みつけながら、言葉を出そうとするが、声がほとんど出せない。

というより、一撃当たったらそこで止めるだろ…と言いたいが、声が出ないため、睨み付けるだけにする。

「ま、気絶しないだけ凄いな。気絶したら攻撃止めようと思ったん

だが、気絶しなかったからついついやっちまった。」

（何故気絶しなかった自分！）

そう思うも、今回はもうすでにボロボロにされているため、次回から頑張つて気絶しようと思う葉家だった。

少しして、ようやく声が出るようになった葉家を見て、ラダがどこらしょつと座りながら聞く。

「回復したらもう一回やるからな。あと、なんか教えてほしいことがあるか？」

「教えてほしいことなあ…、たくさんあるが、ここって魔法とかあるのか？」

そういうと、ラダは呆れた顔をする。

「当然だろ、何言つてんだ？頭大丈夫か？」

「失礼な、少なくともお前よりは大丈夫だ」

といつても、ラダの反応は別におかしくはない。

現代風に言うならば、日本とかアメリカあたりで、「ここには科学はありますか？」と聞いているようなものである。

あまりにも当然のことを聞いてくるために「頭大丈夫か？いい病院紹介しようか？」となるのである。

「じゃあラダ、魔法の解説をお願いな」

「解説？お前もしかしてももの凄い田舎から来てたりするのか？ま、いいけど。」

そうだな、魔法つてものは魔力を消費して普通はできないことをやるものと、言葉や文字などで、よく分からんことをして、で相手の精神やらを操ったり魔法を使ったりするやつだな。

魔力には種類があつて、普通にほぼ全てのやつが持っている魔力、まりよく魔法の種族だけが持っている超力、ちようりよくごく稀に発現するか、神しか持つてないと言われる神力、しんりよく魔獣や魔王がもつ邪力、じやりよくそして元素やら始まりやらよくわからん元力、げんりよくあとは伝説上の真力ましんりよくだな。」

「六種類…結構あるんだな。」

「まあな、説明を続けるぞ？」

普通の人間は、これらの魔力から、1〜2種類ぐらいの魔力があるんだ。

大体は魔力と極少量の元力だ。

俺の場合は、魔力と超力と少しの元力だな。

だいたいほとんどの魔力を持つてる奴らは合計で10000とすると魔力は9999、元力は1という感じだ。ちなみに俺は魔力を8004、超力を1972、元力を24つてところだ。

元力は多ければ多いほど身体能力などを強化する。

魔力は持つだけじゃ少ししか変わらないな。

そして魔法だが、魔力を練って放出する前に言った言葉…詠唱だな、によって形を変える。

たとえば炎の魔法なら炎に、治癒の魔法なら、治癒する何かに、時間を止める魔法なら時間を止めるストッパーに変化する。

ま、そこらへんは気にするな。

元力は実は極一部のとある一族ぐらい以外は、練り方も放出のしか

たも分らないそうだ。できたら物凄く強いがな。

超力は、普通に魔女の能力を使用する対価だな。超力は魔女一人一人違ってそれ以外に変化できないんだ。超力が切れると、一時的にだが能力が使えなくなる、といっても超力の回復は凄まじく早いそうだから大丈夫だろ。

神力やら邪力やら真力は知らん。

んで、言葉や文字で魔法を使う魔法だが、通称は言霊魔術、などと言われてるな。」

「なんで言霊魔法じゃないんだ？」

「語呂が悪いからだそうだ。」

言霊魔術は魔力を使用せずに魔法を行使できる唯一の魔法だ。

といっても言葉や文字はながいし、一回噛んだり、文字を間違えたりしたらやり直しだけだな。」

「ふむ…」

「ま、でも魔力が切れた時の為にそういういろんな奴らは木とかに文字を書いて持ち歩いてたりするな。」

そして、おっともうそろそろ大丈夫かな？と呟き、立ち上がりながらバキボキと首を回したりしている。

そしてそのまま葉家の肩を持ち、立たせて輝くような（いじめっ子がおとなしい子をいじめる時のような）笑顔でこう言った。

「よし、もう回復しただろうから再開するぞ。次は初めてじゃねえんだから一発ぐらいはかわせよ。あと、休憩は無しな。」

第六話 修行と魔法の説明（後書き）

ステータス（F a t e風、サーヴァント用では無く、人間用）

筋力：E 魔力：-

耐久：D 敏捷：D

幸運：D 宝具：D

所持スキル

限界破棄：A

人間として、生物としての限界を無くすスキル。

限界を無くしたことによって、成長率にも影響がでており、もの凄い早さで成長できる。

不老：D

神がこっそりつけたスキル。

ただの不老のため、寿命で死ぬことはないが、それ以外では普通に死ぬ。

所持宝具

駄菓子ダガシノメの眼

ランク：D

レンジ：-

最大補足：-

駄菓子の眼とありながらうまい棒しか造れない。

右目でうまい棒を造り、左目でそのうまい棒にちょっとした能力をつける。

使用時は、右目からは歯車、左目からは魔法陣のようなものが浮かび上がることがある。

ただし、浮かび上がらせるのはON、OFFの切り替えが可能。

第七話 修行中（前書き）

相変わらずの駄文ですが、お付き合いお願いします。

第七話 修行中

なんとなく日記をつけてみる。
といっても修行風景を書くだけだが。

修行第二日目

始めの攻撃は、10回中3回くらいよけることができるようになった。

だが、よけたところを狙ってくる攻撃はいまだによけられない。
どんどん耐久力ばかりが上がってきている気がする。

修行第三日目

修行内容に朝、昼、夜、三回の走り込みが追加された。

朝は食べられる野草を探す途中で熊（全長が6mぐらい）に追われたり、昼は湖で魚をとっている最中に巨大なよくわからない魚（全長10mぐらい）に追いかけられたりした。

嬉しいことに夜は追いかけられなかった。

攻撃をかわす修行は、初撃を10回中4回ぐらいかわせるようになった。

修行第五日目

体力も耐久力もけっこう上がってきた気がする。

熊に殴られたけどもの凄く痛いだけだ。

ラダの攻撃はいまだにきつい。今日、二発目を一度だけかわせた。

修行第十日目

走り込みの時に走る距離が、前と比べるとぐんと増えた。

ラダが言うには今の自分の限界ギリギリくらいにしていたそうだ。
めんどろなやつめ。

攻撃は三、四撃かわせるようになってきた、と思っただけでなく
なったり、かわせるようになってきたりが繰り返されてる。
これも限界ギリギリってやつかな？なんて思った。

修行三十日目

動物を殺すのに抵抗がほとんど無くなった。
なに？初めて殺したとき？フツ、日記なんか書けないほど鬱みたい
なのだったんだよ。

そういえば攻撃は10撃以上は余裕でよけることができるようになって
ってきた。

走り込みは森を3周とかになってきた。

…小麦が底をついた。パンが食べられない、だと？

修行五十日目

いつもと変わらずに、ご飯を食べ、走って、野草を採って、攻撃を
かわして、走って、魚をとって、攻撃をかわして、ご飯を食べて、
走って、動物を狩るを繰り返す。

そう言えば、髪は伸びているが、身長が伸びてない。まさか…な。

修行七十九日目

背エ、伸びてませんでしたよ。ええ。

ラダはぐんぐん伸びてるきがするのにな。

攻撃をかわす修行と走る修行の他、自由に修行する時間が二時間ほ
ど与えられた。

せっかくなので某会長っぽく正拳突きをしている。といってもせい
ぜい二時間なので一万回とかふざけた数字はできないが。

修行百二十四日目

「ようやく俺の攻撃を全てかわせるようになったかヨウカ。まあ、予定していた時間よりはやかっただからよかったな。」

「ゼエ、うる、せえ、

くそっ、体力は、ハア、けっこう、ついたと、思った、のに。」

カラカラと笑いながら喋るラダ。

そんなラダの言葉に、肩で息をしながら返す葉家。

そんな葉家を気にせずに、ラダは話しはじめる。

「さて、これから魔法の修行をするつもり、なんだが。」

「なんだが？」

途中で不自然に言葉を区切ったラダに首をかしげる葉家。
そんな葉家から少し目を外しながら喋るラダ。

「いや、あのな。なんというか…。

まあ、ヨウカ、お前から魔力のどの種類も感じられねーんだわ。」

「へ？」

ようやく異世界やファンタジーなど代名詞の魔法を使えると思った葉家は、その言葉に啞然とする。

それでも、お構いなしにラダは言葉を続ける。

「だからなヨウカ、簡単に言うと、お前には魔力が全くない。」

ついでに言うと、魔力は人それぞれで元から決まっているが、魔力はその元々のまま、どうあがいても増やすことができない。つまりは言霊魔術しか使えねーんだよ。」

「なん…だと？」

その言葉にショックを受けたように、葉家は地面に膝を付き、ついでに手を地面に付けてorzのポーズをつくる。

「お、おい、葉家。言霊魔術だつてけっこういいんだぞ。」

魔法をこれで代用できるし、文字を書いた物を持ち歩けば使い捨ての詠唱破棄だぞ。

しかも魔力を消費しないから、手持ちを尽かさなにかぎりはかなり強いんだぞ。

ほら、飴やるから立ち直れ、な？」

「飴でつられるとも思っているのか？バカなのか？死ね。」

「ちょ、死ねはねえだろ。ほら、はつか味の飴だぞ。」

「ただのお前の嫌いな味なだけだろ。」

まあ、せっかくなので、飴をもらうことにする葉家。その葉家が飴を舐めているうちに話をすすめるラダ。

「話すぞ。言霊魔術の利点は、魔力を消費せず、魔法を使用できることだ。」

だが、時間がかかるうえ、文字は使用した後消えるし、言葉もいちいち一回一回言わないといけない。

だから普通は10枚程度の言霊魔術の文字が書かれたなにかと、魔

力を消費する魔法を使う。

ただ、ヨウカのように魔力が全くない場合は、言霊魔術とかぐらいしかないな。」

「ぬぐつ…」

「言霊魔術の初期魔法としては、通常の魔法の初期魔法と同じファイヤーボール。ただ、詠唱が長い。

普通の魔法の詠唱は、“炎を司どりし、偉大なる精霊よ。彼の者に苦痛の炎を与えたまえ、ファイヤーボール”」

ラダがそう唱えたたん、その手のひらに、拳大の大きさの炎の玉がでてくる。

その炎の玉を手を振って消したあと、葉家の方をむきなおし、話をにつづける。

「次は言霊魔術の方だ。言霊魔術のファイヤーボールの詠唱は、“我の文字に問う。我の言葉に問う。精霊よ。我が言霊にて、その力を見せつけよ。言葉を紡ぎ、文字を刻み、浸透させ、共鳴しろ。我が言霊と契約せよ。”

の後に普通の詠唱がくる。

文字も当然同じだな。でも、ここらへんは修行はしない。

魔法ってのはよほどの大魔法じゃねえかぎりはただのサポートだしな。

魔法の書物とかは家にあるから読んどけよ。」

そういつてラダは締めくくる。

そんなラダの言葉を聞きながら、葉家は少し、ちよつとした考えごとをしていた。

（言霊魔術を書いたうまい棒とか、言霊魔術を使っても消えなかったり、文字も復元したりするうまい棒って能力で造れないのかな？）

第七話 修行中（後書き）

色波葉家のステータス

パワー 高校生ぐらい

スピード 秒速25mぐらい

スタミナ フルマラソン（42・195km）を全力疾走で走り
きる

ガード ダンプカーに衝突して軽傷、または無傷

テクニック うまい棒の扱いが異常にうまい。投げると狙った所に
必ず当たる。

スペシャル 特に無し。だが、不老である。

第八話 ギルドへ（前書き）

この世界でのお金は、

ナル（5円程度）

セム（50円程度）

アイ（500円程度）

ロス（100000円程度）

という感じのにしようと思っています。

また、今回も駄文ですが、お付き合いお願いします

第八話 ギルドへ

結果から言えば、うまい棒に言霊魔術を刻みこんだものを造るの
できた。

文字の復活は、1分程度かかっていたが、ちゃんと成功した。
また、ラダの家にあった魔法の本に、言霊魔術は増やすことができ
ない、と書いてあったが、普通にオリジナルのや、他のアニメなど
の魔法も使えた。

ちなみに、走り込みや正拳突きはまだ続けしてる。

今日は、ラダに、話があると言われて、部屋の机を向かい合っ
て座っている。

「ヨウカ…、俺、大変な事に気づいてしまった…。」

非常につらそうに、かつ悲しそうに言う黒髪黒目の青年、ラダ・ク
ルズール。

「なんだよ、その大変なことって。」

めんどくさそうに、かつ眠たそうに言う白髪の5歳くらいの幼
少女、色波葉家。

そんな葉家のことなど眼中にすら無いように、話を続ける。

「ああ、…あんなヨウカ…、俺は……」

魚とか木の实とか肉とかを焼いただけの飯に飽きたんだよ!」

「もう黙れお前」

ラダの自分勝手な言葉に、額に青筋を浮かべる葉家。

「だからさ!ギルドで金貯めてうまいもん食おうぜ!」

「ギルド?」

まだ聞いたことが無かったため、この世界にギルドが無いと思いこんでいた葉家は少し驚く。

そんな葉家のようすに、ギルドのことを葉家は知らないと思ったように説明をするラダ。

「ああ、ギルドって言うのは、依頼を受けて、それを達成、報酬をGET!という感じだ。

たとえば、庭の雑草を抜け、とか、オークの群れを倒せとか、街まで護衛しろ、とかだな。」

説明したからさっさと行く!と言いたげなラダに、葉家も溜め息をつきながら、ついていくのであった。

「それで?どこ行くんだ?」

その後、フード付きのコート(なぜかポケットに入っていた。普通は入るはずがない)を着た葉家は、隣を歩くラダに話しかける。

「ん？ああ、この国ラダトス国をぬけて、商人の国、テレアストに行く。

そこでギルド登録をする。

お前は経験がほとんど無いからな。」

「そのテレアストにはどのくらいの時間でつくんだ？」

「ん？いまから走って3時間ぐらいだ」

「…微妙な距離だな。」

「ようやくついたな…」

どこか疲れたように喋る葉家。

そんな葉家に笑いながら話すラダ。

「フハハハハ、どうしたんだ？そんなに疲れて。」

「お前が寄り道したり道を間違ったりしたからだろ。」

「いやー、気にすんな。気にすんな。」

「…ま、いいや、ギルドの建物いくぞ。」

呆れたように溜め息をつきながら葉家は言う。

「あいさー」

そんな葉家とは裏腹に心底楽しそうに、嬉しそうにラダは言った。

ようやくギルドについた…のだが。

「ボロくね？」

あまりにもボロボロ。ところどころ木が腐り、穴もいくつが開いている。

さらには、扉もほとんど原型をとどめていない。

しかし、そんなことをいちいち気にしていたらきりがなし、隣にいるラダも急かしてするので、葉家は中に入ることにする。

驚くことに、中は普通の建物だった。

何かの魔法を使用しているのか、中からは穴などが見られない。

カウンターに行き、登録をしようとすると、受付の人が説明をしてくれるようなので、してもらうことにする。

「このギルドでは、依頼を受け、それを達成させ、ここに報告をすることにより、報酬を貰う、というシステムです。

基本的に依頼は国の人々が依頼しますが、稀に国王直々の依頼や、国、町全体からの依頼などもくることがあります。

ギルドにはランクがあり、初めての方はFランク、その次がE、そしてD、C、B、A、ダブルエーAA、トリプルエーAAA、エキストラS、EXと続きます。

国王からの依頼にはA以上、国や町からの依頼にはS以上のランクでないと受けることができません。

それ以外は自由に依頼を受けることができますが、ランクとは信用の証、そのランク以上ではないとその依頼を受けさせない、という依頼もありますからご注意ください。

ランクを上げる方法は、同じランクのものを10以上受けるか、それ以上のランクのものを5つ受けるというものです。

ただし、SクラスからEXクラスに上がる為には、EXクラスの依頼を3つ受けること以外では不可能です。

それでは、こちらの用紙にの質問に回答を書いていてってください。

ー

受付の人から渡された用紙にはさまざまな質問が書かれており、ペンには、嘘を書けなくする魔法がかけられてあった。

質問は、名前、性別、年齢、戦闘タイプ（魔法使いとか、剣士とか）、前衛か後衛か、など10個程度の質問があった。

とりあえず全部の項目を埋めて、カウンターの受付の人に渡す。

そして、ギルドカードを発行してもらった。

受付の人が言うには、

「ギルドカードは、身分証の変わりにもできますが、再発行するためには、ランクを1ランク下げ、20アイ、Fランクの場合は40アイの再発行料がかかりますので、紛失にはお気をつけください。」

とのこと。たまに盗まれたりするらしい。…めんどくさ。

葉家は身分証を手に入れた！

第九話 初めての依頼その1（前書き）

今回も駄文ですが、どうぞお付き合いお願いします。

第九話 初めての依頼その1

さて、ようやくギルドカードを手に入れたので、依頼を受けようと思つので、掲示板のようなものの所に行くことにする。

ここには、たくさんの依頼の詳細などがかれた紙が貼り付けてあり、それらから好きな依頼をとり、カウンターに持っていくと、依頼を受注できる、らしい。

Fランクから順番に上の方に行くたびに受注できる条件が難しくなっている。

Fランクは下の方なので余裕で手が届く範囲なので助かった。

一つ一つ依頼を見ていく。

「一枚目は…」

依頼内容

ピーキーの目玉、角：各10本

報酬：10アイ

条件：特に無し

…ふむ、魔物の目玉と角の剥ぎ取りか。

10アイといえば5000円くらいか。まあまあいいな。

二枚目：

依頼内容

プムの討伐：10匹

報酬：13アイ

条件：無し

低級魔物の討伐…結構簡単そうだな。

三枚目：

依頼内容

薬草の採取：30束

報酬：7アイ

条件：特に無し

んむ…、薬草はそこらへん沢山生えてるしな…」

他にも、店の手伝いや、庭の雑草抜きなどの雑用といったのもあった。

やはり、FやEランクの依頼は、雑用や低級魔物数体の討伐、低級中の上級魔物1匹の討伐などがほとんどであった。

その中から、Eランクの依頼、低級中魔物の中では上級の魔物であるルータ1匹の討伐にすることにする。

報酬も、討伐する数は1匹だけなのに20アイという高額であった。依頼を受注するため、依頼用紙をカウンターへと持っていく。

「この依頼を受けたいんだが。」

「あ、はい、少しお待ちください。」

…依頼内容は低級魔物ルータ、一匹の討伐。

依頼難易度はEランク、報酬は20アイです。

この依頼は、あと、残り10時間以内に終わらせないと、キャンセル扱いになります。

また、この依頼をキャンセルするためには、依頼成功報酬の半分、つまり10アイが必要です。

成功した、という確認のため、大変だとは思いますが、その死体を持ってきてください。

…そういえば、低級魔物ルータの説明をしましょうか？」

「ああ、願います。」

さすがに情報が全く無いと探しだすのに時間がかかるからな。

「はい。分かりました。」

…低級魔物ルータ、低級魔物の中では上位の力を持つ魔物。

鋭く、固い牙をもち、体長は大きいもので10m超、その巨体にあわぬスピードで突進を繰り返し、相手を弾き飛ばす。突進の最中は小回りがきかず、曲がることができないようですが、その威力は絶大です。

この国の入り口から2時間ほど歩いたところにある森に生息しており、他の動物の肉を餌にして食べているようです。」

そんなことを言いながら、受付の人はルータの絵を見せてくれた。

…ただの異常な大きさのブタにしか見えない。赤色の。

ちなみに、肉はたいそう美味で、さまざまな料理の主役として使われ、骨や牙はその鋭さや硬さから、包丁や武器などにも使用されているそうだ。

…ム？なんで説明したんだ？

…まあいい、さっさと依頼を終わらせることにする。

「説明、ありがとうございました。」

「いえいえ、これも仕事ですから。」

受付の人にお礼を言ってギルドの建物をでる。

ちなみに、ラダはもうすでに依頼を受けてそれをしに行っていた。
…アイツならすぐ終わりそうだが。

そんなことを、のんびりと考えながら歩いていると、なぜかもう日は傾いており、ルータがでると聞いた森らしきところについていた。

（これは、アレか？ご都合主義って感じの…
てことは、そろそろ…）

「ブモオオオオオオオオツツ！…！！」

「うわーい、予想的中だー、ってふざけるなー！」

異常に大きな（20mぐらい、…アレ？大きくて10m超じゃなかったっけ？）ルータが目の前にいた。

（いやね、探す手間が省けたのはいいけどね？
いきなりこの巨体と戦うとか…、心の準備ぐらいさせるよ…）

そんなことを考えていると、ルータがこっちに突進してくる。
それを正面から受け止めないように手をそえて、軌道を逸らす。
ルータはその勢いのまま、大木をなぎ倒していく。

（自然破壊！断固反対！っわけで威力下げろよ！）

そして止まったあと、さらにさっきより勢いよく突進してくる。
それを大きくジャンプしてかわし、さらに落ちる勢いのまま蹴りを
いれる。

ガッ!!

「~~~~」

ルータには全くと言っていいほど効いてない。むしろ自分の足が痛みを訴えている。

…なんと、これが自分が出せる最大の威力なんだが。

まあ、仕方がない。自分に力が無いのは知っている。

…ああ、痛いのは嫌なんだけどな。

ルータを倒すにはこれしか無いだろう。

またルータが突進してくる。

葉家は、そのルータの突進を、さけることなく、

正面から受けとめた(……………)。

第十話 初めての依頼その2（前書き）

今回も駄文ですが、どうぞお付き合いお願いします。

第十話 初めての依頼その2

「痛い……」

ルータと正面衝突をして、そのままの勢いで数メートルほど押され、大木にぶつかる。

その衝撃でようやくルータの突進の勢いが無くなる。

葉家は巨大な牙から手を離し、少し後方にさがる。

それを追うようにルータがとどめとばかりに先ほどとは比べようにない勢いで突進してくる。

それを葉家はまた、避けることなく、正面から牙を持って受け止める。

ルータの突進は、後ろにあった大木を牙を持っていく葉家の背中になぎ倒し、勢いを一切ゆるませることなく走っている。

「ガアッ……」

葉家の肺から空気が抜け出していく。体の方は流石と言っべきか、服の方はボロボロなのに対して、体はかすり傷ぐらいしかついていない。それでも、筋力は高校生程度なため、ルータの突進を止めることができない。

ルータは大木を倒した後も、どんどん木をなぎ倒しながら走っている。

そして、異常な勢いのまま、ルータは巨大な岩に向かって、葉家ごと突進した。

ドゴオオオオオオオン！！！！！！

大きな破壊音と視界を覆う砂けむり。
足音が聞こえないため、ルータの突進はもう止まっているものだと思うられる。

ゆっくりと砂けむりが晴れてくる。

完全に砂けむりが晴れたとき、先ほどルータが葉家ごと突っ込んだ場所には、ルータの牙を抑えて立っている葉家と、岩に衝突したためか、気絶しているルータがいた。

「ゲホッ、ゴホッ、ああ、いてえ。

ていうかなに気絶してんだよコイツ。

今から自分が反撃しまーす、ってところだったんじゃないのかよ。

「まあ、いいか。気絶してくれた方が当てやすいし、はずしたらまた痛い思いしなきゃなんねーからな。」

そう言いながら、葉家はルータのそばに歩み寄り、その額に手をそえる。

「本当は牙壊して無力化させたかったんだが、牙壊しても突進されるだろうし、依頼したやつが牙が必要かも知れないからな。

「さて、返すぜ？お前の衝撃。」

言い終わったとたん、ベコンッ！と大きな音をたてて、ルータの頭部が大きくへこんだ。

「しくみは簡単、単純明快。

ただ、お前の突進の衝撃を一切逃さないように体にとどめて、それ

を一気に解放しただけ。ただの簡単な足し算だ。

お前の突進の衝撃が2回に、木にぶつかったときの衝撃多数、岩にぶつかった衝撃1つってところだな。

…でも体にとどめるからもの凄く痛いんだがな。

ま、とりあえずお前の死因はただの自業自得。アホみたいに突進してくるから死んでしまっただよ。

…とりあえず、あの神に会わ^{クス}ないようにつてことぐらいは祈ってやるよ。」

なんて事を言いながら葉家は後ろを向いて歩きだそうとしたところで。

「…そう言えば、コイツ（ルータ）どうやって運ばっ…」

全くなにも準備せずにルータを倒したことを後悔するのであった。

ルータがなぎ倒した木を使って必死に頑張つて木を削ること2時間。
…木で木を削るのって難しいな…

ようやく簡易的な台車っぽいものをつくれた。

それにルータをのせ（木に全力で自分からぶつかってその衝撃でのせた。）必死に押すこと3時間。

「ようやく、ギルド入り口についた…」

とりあえず、文句をいうためにルータをのせた台車？をギルド内に入れる。

…なんで入れることができたかは気にしないことにする。
カウンターに近づき、話しかける。

「すみません、依頼達成の報告に来たんですが。」

「はい、それでは、ギルドカードを見せてください。」

ギルドカードを受付の人に見せる。

「はい、受注された依頼はルータの討伐ですね？
依頼達成の証拠はそれでよろしいですか？」

「ええ、大丈夫です。
…ですが。」

「どうされました？」

本当に全くルータのサイズに疑問を持っていない受付の人に少しイラッとする。

抑えろ我慢だ我慢。

「ええ、討伐したルータの大きさが、説明されていた大きさより遥かに大きいように感じましたので。」

遥かっていうよりほぼ2倍だったけどね？

「そうですか？そうだとしても、依頼内容は変更されません。運が悪かったと諦めてください。」

いやいやいや、おかしいだろ、それ。

「いえいえ、説明されたルータより、2倍以上も大きいサイズだったのにEランクの依頼というのは少しおかしいのでは？と思ったので。」

「そうだとすると、そのルータから逃げ、他の小さいルータを倒せば良かったのではないですか？」

「逃げることはできなかったのですよ。あの大きさに似合わないほどのスピードでしたね。」

危うく死んでしまいそうでしたよ。」

「そうですか、生きていて良かったですね。」

しかし依頼の内容は当ギルドでは一切の変更ができませんのでこんなことで時間を潰してないで新しい依頼を受けたらどうですか？」

…こいつは謝るということができないのか？

「オッ？なにしてんだヨウカ。」

（ナイスタイミングだらダッ！）

「ああ、ちよつと説明されていた魔物の大きさと討伐した魔物の大きさが違っていてな。」

「んあ？んなもん気にすんな。さっさと報酬もらえ」

ブルータス、お前もか！

「…ああ、もう、分かったよ。分かりましたよ。」

「すみません。依頼の報酬をいただけませんか？」

「はい、こちらが報酬の20アイです。」

あとE以上のランクの依頼を4つか、Fランクの依頼8つでEランクへと上がることができます。」

20mの巨体カウンター奥から出てきた人によって回収されていく。

…もったいないなあ…

「さて、まだ俺の文あわせてもたいした額じゃなかったしどんどん依頼受けようぜ。」

まあ、気にせずのんびりやっていくかな。

第十一話 暫く後（前書き）

遅くなりました。

今回も駄文ですがどうぞお付き合いお願いします。

第十一話 暫く後

前の出来事から結構時間がたった。

はじめは金目的だったが、現在はラダが調子に乗りはじめて、「お前を少なくともSランクにする！」と言っていたのでどんどん依頼をこなしている。というよりさせられている。

そのお陰か現在は5000口スほど貯まった。日本円にして5億円だ。

ちなみに、今でも衝撃は体に留めておくと痛い。というよりきつい。なんというか衝撃が細胞を一つ一つ圧迫して内側から爆発していきそうな感覚になる。

斬撃だつて体に留めておくこともできるが、つねに体の内側を切り刻まれてるようで怖い。さすがに、爆発しそうではないが。

…少し、話がそれた。

んで、ラダの提案によつて着々と依頼をこなしている自分は現在Aランク。…本当に頑張った、と思う。

んで、今回は珍しく国からの依頼がギルドに張り出されたそうなので、ラダに誘われてギルドに向かっている。

見に来ただけだが、できそうならやろうと思う。報酬がいいらしいし。

依頼内容は見ていないので分からないが、Aランク以上でないといけないってのは分かる。そういうのは普通に説明できてたからな。

…ああ？ラダ？Aランク以上限定だろうって？あいつ普通にEXランクだったよ。確か二つ名は………「超速回転」、どんな意味だそれ。

まあ、あとA A Aランクの依頼一つでA A Aランクに上がることができるし、ちょうどよかった。

Sランクになったらやりたいこととかたくさんあるしな。本当にちよつとしたことだけど。

…そんな感じの考え事をしているあいだにギルドについていたようだった。扉をくぐって中に入る。いつ見てもボロにしか見えないのにな。

…やはり、国の依頼が珍しいからかなり混んでいる。国からの依頼は自分も初めてだが。

とりあえず依頼内容を見る。…いや、見ようとする。

…ああ、うん。見えない。背が低いところいう時とかに不便だ。全く見えない。

人ごみの中に入っても見えないだろう。…ていうか、なんであんな高い所に依頼用紙貼ってんだよ。自分がいいのは動態視力だけなんだよ。視力は普通だから見えねえんだよ。不親切だろ、不親切。もしかしてあれか？背丈が低いガキは帰ってか？差別だろ差別。

とりあえず人がある程度のくまで待ちたいが、きつと、というより十中八九、この人ばかりは無くならないだろう。

いつそ思いつきり、現在まで貯めに貯めた衝撃をここで解放して人をどかさうか。というより吹っ飛ばそうか。そうしたらずいぶんとストレス発散ができそうだ。…しないけど。

なんて思いはじめたあたりでラダが話しかけてきた。

…そーいやー、いたな、お前。

うん、すっかり忘れてた。便利な奴を。

「おう、ヨウカ。依頼内容はフルドラゴンの討伐、報酬は一匹で700ロス、だな。参加資格はAランク以上。当たり前だが、クリアしてるな。」

フルドラゴンとはドラゴンの下位種だ。

圧倒的なパワーと巨体を持つドラゴン。羽はあるが空は飛べず、陸を走り、中位種のドラゴンと変わらない硬さの鱗を持つ。また、口から圧縮した空気の塊を吐き出し、広範囲に渡るあらゆるものを吹き飛ばす。なにが愚か者だ。滅茶苦茶強いじゃねえか。

ちなみにドラゴンは下位種でも普通に一国と同じ力を持つ。そのため、依頼しているのが国なのだ。ふざけるな、と言いたい。国に匹敵ってなんだよオイ。

「まあ、それでも、一匹、700ロス、つまりは7000万円。たった一匹倒すだけでそんな大金が手に入る。いや弱くはないけどね？自分一人でも頑張れば倒せるけど。」

「はいはい、了解、了解。それで？今から行くのか？」

ラダから聞いた国からの依頼の仕組みはなかなかいいもので、依頼したものを、一つ持つてくることにその分の報酬が渡されるらしい。二匹渡すと1400ロスと言うこと。しかもそれなら二回分依頼をクリアした事になる。三匹なら三回分。

まあ、つまりは期限内に特定の奴をとってこいって訳だ。だから、はやく行った方が有利なのだ。

「いや、眠いから寝る。」

その言葉に思わずこけそうになる。「いや、予想はしていたが。ラダは基本的に気まぐれなのだ。自分を助けたのも、修行をつけた

のも、ただの気まぐれ。

…微妙に慣れてしまったけど。

まあ、自分もほんの少しだけだが眠かったのでちょうどいいし、眠ることにする。

「ああ、そうだな。じゃあ自分も眠るとするかな。んじゃ、おやすみ。」

「ああ、お休みだ。」

ふわぁ、とあくびをしながらベッドに潜る。きつとラダは隣の部屋でもう寝ているだろう。

電気を消し、布団を頭からかぶる。というよりは布団に潜り込む。

眠気はすぐにやってきた。珍しい。

せつかなので眠りに入る。ああ、そういえば、美味しい料理食べに行ってたな…、なんて思いながら。

第十二話 ドラゴン退治（前書き）

かなり遅くなりました。

今回も駄文ですが、お付き合いお願い致します。

第十二話 ドラゴン退治

朝、自分は、国外へと続く道を歩いている。

これはもちろん、フルドラゴンを討伐するためだ。

二手に別れた方が効率がいい、ということでラダと離れてフルドラゴンの住処へ歩いている。

少なくともフルドラゴンはドラゴンの種族なのですぐに見つかるはずだ。全長も普通にでかいし。

というよりドラゴンの種族には小さいドラゴンはいないそうだ。最も小さいのは生まれたれでの3mくらいの大きさ。

見つけるの簡単すぎじゃねえか。倒すのは容易じゃないけど。

ただ、ドラゴンは数が多い。伝説級とか何千年、何万年も生きたドラゴンはさすがに少ないけど。

現在生きているドラゴンは約1億8000万頭以上、種類だけでも60を超えるという。さらにそれで下位のドラゴン1匹で1国に匹敵するほどの強さとか。

もうお前ら世界でも征服しろよ。と言いたい。

まあ、それでもそいつらを時間はかかるけど、たった1人で絶滅させる程の強さを持つ奴が何人かいるからバランスがとれているんだと。恐ろしいね。

もちろんラダもその内の一人だ。EXランクすげえ。自分？自分はそんな力はねえよ。せいぜい最強種を10匹倒すので精一杯だ。

っと、もうフルドラゴンの住処の近くについてしまった。考え事をしているといつもすぐに時間がたつな。

「さて、いつもならここらへんでフルドラゴンの鳴き声がきこえてくるってかんじなんだが…」

全くその気配すら感じない。…おかしいな、自分は力が無い分、気

配察知とかのサポート系はまあまああるという自信があるんだが…。
さっきまで気配があつた気がしたんだけどな。

「一応数十、数百kmくらいならほぼ全ての生物の気配を察知できるんだが…。」

むう…、なんでだ？アレか？自分のミスか？

修行は休まずにやっているし、なまっているという感覚もない。勘違い…かな？

「まさかの骨折り損のくたびれ儲けだな。わざわざこんな遠いところに来たのになあ。」

まあ、別にいいんだけどね？どうせ考えながらだったからあつという間だったし。

でも、なんで勘違いなんかおこしたんだろうな…。いままで全然無かったのに。もう一回基礎からやり直そうかな…なんて考えてきたあたりで…。

「グルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！
！」

フルドラゴンを発見、というよりフルドラゴンが飛んできた。
そう、フルドラゴンが文字通り飛んできた。

「アレレー？こいつ（フルドラゴン）って飛べないんじゃないかなかつたっけ？」

「いや、飛んではいない。うまい棒に付与した『食けるとある程度状況の把握ができる』という能力のおかげで分かった。」

コイツ…フルドラゴンは、住処の近くにある高い崖らしき何か（少なく見積もっても数kmはある）からあろうとか飛び降りて、さらに上空に向かって圧縮した空気を放ちながら思いっきり地面に向かつて羽ばたくことで落下する速度を上昇させ、その後羽を閉じて腕を伸ばして体を少し細長くすることで空気抵抗を少なくする。そして腕一本のかなり細い爪一本に着地した時に全ての体重がかかるようにしている。

まあ、つまりは何が言いたいかというと。

「コイツって結構賢かったのかよ。というか、自分一人のために、コレってどうよ？」

あきらかなオーバーキルだということだ。

さあ危険、フルドラゴンの体重（数十〜数百トン）に加え、重量に従って落下するスピードにいろいろなことをしたことで上乗せされるスピードが、広範囲で落ちるならまだしも狭い範囲で落ちるのだ。

つまりは対してかわらないが、メラゾーマとイオナズン、その魔法を放つ相手は同じで受ける相手は特に弱点も耐性もないスライム一匹に当てる時、どちらが大きなダメージを与えられるか考えてくれるといい。

さすがに単体用のメラゾーマが全体用のイオナズンを下回することはめったにないだろう。

おっと、また考え事をしてしまった。そんな状況じゃないのにもう落下してくるフルドラゴンは間近だ。ちなみに考え事をしていた時間は0.07秒くらい。

「自分、まだ何もしていないんだが？」

なんて眩きも虚しく、自分はフルドラゴンに潰された。

第十三話　さらなる進化？（前書き）

誰か、文才を・・・くださ・・・ガク

いつもどおり駄文ですがどうぞお付き合いお願いします

第十三話　さらなる進化？

ドゴオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!

「がつはああつ！」

ガードもなんの準備もせずにとただ突っ立っていた体に、フルドラゴンの全体重をかけた一撃を喰らう。体中に深い傷ができ、血が飛び出す。

まるで体を二つ、いや、数百のパーツにちぎられるような痛みで顔を歪める。

骨も粉々に砕け、既にこれでもかというほどぐちゃぐちゃな臓器に刺さっている。

「いやはや、ここまでの威力があつたとは思わなかつた。」

外見は綺麗（とは言ってもボロボロだが。）であるとはいえ、実際の体の内側は生きているのが不思議なくらいぐちゃぐちゃだ。

かろうじて無事なのは心臓や脳といった生命活動をする内で最低限必要なものだけ。

他はもう駄目だろう。

それでも、痛みを感じることから神経などは無事なものもあるようだ。

まあ、それが無事だとしても。

「（自分はそろそろ終わり（リタイア）かな？）」

さすがにこの怪我では生き残ることができないだろう。
こっちの世界に来て、早すぎるかもしれないがきつと自分は死んでしまつ。

まあ、楽しかったし、いいか。

追撃とばかりに、何度も、何度も、フルドラゴンは、圧縮した風をぶつけてきたり、足で踏み潰そうとしてきたりしてくる。

自分を原型をとどめないようにしたいのか？コイツは。

…はッ、この状態じゃあ笑えねえ冗談だな。

なんて考えている間も攻撃は止むことはない。

しかし、何十発、何百発くらっても潰れることがない自分に疲れたのか、それとも面倒臭くなったのか、コイツは何故か風を操れるように、自分の周りを一瞬で真空へと変えた。

「……………！！！」

襲いかかってくる、ありえない程の圧力。

体全てを潰されてしまいそうな程に、強い。

…だがな？

自分はな、忘れてる奴もいるだろうが性別は女なんだよ。

…だからさ？

「…せめて、せめて死ぬ時の体ぐらいは綺麗にしろよっ！！！！！」

そう叫びながら、もう既に限界を超えているであろう体に鞭を打って立ち上がる。

理不尽？我が儘？そんなものは知らん。自分は綺麗好きな女の子なんだよ。

「おら、よっ！」

自分を踏み潰そうとしてきていた足を受け流し、バランスを崩す。真空は、先程叫んだ時に無くなっていったようだ。

ついでに、自分は無意識の内にフルドラゴンの攻撃の衝撃を、全

て蓄えていたようだ。

自分の体よ。なかなかいい判断だ。

足に少し衝撃を貯め、地面を蹴る瞬間に一気に解放。

これだけで、通常なら考えられない速度がでる。

そして、フルドラゴンの上に飛び、頭を掴む。

「やっと、捕まえたな」

そして、衝撃を解放した。

「…ものすごく疲れた。」

たった一匹倒すだけでここまで怪我をするとは思っていなかった。

さすが一匹で一国とタメをはれるぐらいのことはある。

んあ？自分の体限界を超えてたんじゃなねえのかって？オイオイ、自分が神に貰った能力は『限界破棄』だぞ？

限界なんざ存在しねえんだよ。

まあ、動かない体を無理やり動かすための代償はあったけどな。

代償つつつてもそれを下げてそれ以外を上げるって感じなんだが、ちなみに代償として下げた能力は筋力だ。

「だから、フルドラゴンの討伐証明用の玉が軽くて本当に良かった。」

重かったら持っていけなかったしな。

さすがにフルドラゴンなどの大きな生物は討伐証明用のアイテムを持っていくだけでいいようだ。

ちなみにドラゴン全般の討伐証明用のアイテムは舌にはまっている小さな玉である。

ドラゴンの種類などにより、大きさ、色、籠もっている魔力量が変わると聞いた。

その玉は、ドラゴンが命を失った時に出現し、何十年かほっておくと卵に変わって転生的なことになるらしい。

…おっと、さすが考え事、あっという間にギルド施設の扉の前だ。ふははははははー…

「ギルドについたから、さっさと玉渡して寝よう。」

そう言いながらカウンターへと歩いていった。

第十四話 ギルドにて…（前書き）

おお神よ…。私に文才と自由な時間を与えてください…。
今回もいつも通り駄文ですがどうぞお付き合いお願い致します。

第十四話 ギルドにて…

「あの…、すみません。」

誰もいないカウンターに近づいて、奥の方に向かって声をかける。

「あ、はいはい、なにか御用ですか？」

少しすると、慌ただしく受付の人が出てくる。

「ああ…、依頼を達成したので報告しに来たんですが。」

「あ、そうですか、それでは、ギルドカードを見せてください。」

ポケットからギルドカードを取り出して、受付の人に見せる。

受付の人はギルドカードを受け取ると、水色の水晶のようなものに入れる。

少ししてその水晶のようなものから「ピー」という音が聞こえた。

「はい、ヨウカ様ですね。それではフルドラゴンの宝玉を見せてください。」

ポケットに入っていた宝玉（正式名称は宝玉らしい）を受付の人に渡す。

しかし、置いたフルドラゴンの宝玉を見て、少し驚きながらも言う。

「いえ、フルドラゴンの宝玉ですよ？」

…む？何かおかしかったのか？自分はフルドラゴンを仕留めたはずなんだが。

「え、と？それってフルドラゴンの宝玉じゃないんですか？」

まさかそんなことは無いと思うが、念の為に聞いておく。

「はい、というより見たことも無い宝玉ですね。たしかに宝玉ではあると思うのですが…。」

ええ…。予想的中とか…。

おいおいおいおい、まじですか？自分が苦勞して手に入れたフルドラゴンの宝玉の筈の物が実は違う物でした、ってことか？

…勘弁しろよ。

まあ、今日は疲れたし明日またフルドラゴンを倒せばいいだろ。

「というわけで、自分は眠いのでその宝玉を返してください。」

「何がというわけなのかはよく分かりませんが…、この宝玉をお返しすることはまだできません。」

「いや、それ自分のですよ？何で返してくれないんですか？」

「見たことが無い宝玉だったのと、伝説種のフルドラゴンによく似たドラゴンが一匹復活した、と今日報告されまして、もしかしたらあなたが倒したのがその伝説種なのかな、と思ったのです。」

なるほど、

「納得できません。返してください。」

「嫌です。」

「……………」

「……………」

「じゃあ眠るんで、それちゃんと返してくださいよ？」

「帰るのはまだ駄目です。」

「……………」

「……………」

「コ、コイツ……………」

「眠らせてください、自分は疲れているんです。」

「駄目です。この宝玉がどのドラゴンの宝玉が分からなければ帰ってはけません。」

「こうなったら……………」

「力ずくで取り返す！」

一瞬で受付の人が握っていた宝玉を持つ。

そして指を一本ずつ外して……………」

外して……………」

外して……………」

「なんつー、馬鹿力だコイツ…。」

ピクリとも動かないだと？

「あなたの力が弱いだけでは？」

「しまった！そうだった！」

呆れたような目をこちらに向け、溜め息をつきながら受付の人が喋る。

溜め息をつきたいのは自分の方なんだが。

「チツ、待てばいいんでしょう？待てば。」

自分は大人だからな。

別に取り替えせないから諦める訳じゃないぞ！本当だからな！

「ええ、あと1時間ほどで分かると思いますので筋トレするか、筋トレして待つててください。」

「まさかの筋トレ一択！？」

第十五話 眠かったり疲れてるとテンションがおかしくなる

眠いのやらきついのがやらの痛いのやらを我慢して一時間と三十分。ようやく、宝玉の解析が終わったらしい。言ってた時間より三十分も遅いじゃねえか。

「解析終わったんでしよう？眠るので宝玉を返してください。」

だが、ついに自分は眠ることができるのだ！

我慢して、さらに我慢して、我慢しつくしたこの一時間と三十分。その我慢がようやくむくわれ、自分は眠ることができ…

「駄目です。」

……ん？

ああ、これはアレか。聞き間違いってやつか。

物凄く疲れているからきつと聞き間違えたんだろうな。うん。

仕方ない。自分のうっかりさんめ。

受付の人が宝玉を渡さないことからきつと自分の声が聞こえなかったのだろう。つまりさっきは「もう一度言っていただけませんか？」みたいなことを言っていたのかな？うん、きつとそうだ。

まったく、最後の最後に相手に聞こえない言葉を言ってしまうとは…。

疲れているとはいえ、いや、疲れているからこそ許されないことだな、うん。

まあ、そんなことぐらいもう一回言っしまえばいい。

ゆっくりと息を吸って、さっき言った言葉とほとんど同じ言葉を喋る…。

「解析が終わったのなら、宝玉を返していただだけませんか？」

こんどは一文字、一文字ゆつくりと、はっきりと、受付の人に聞こえやすいように喋る。これなら受付の人もしっかり聞こえるだろう。よし、さあ、これでようやく自分は眠ることができるぞ…。

「あれ？先ほどの言葉聞いていました？まだこの宝玉をあなたに返すことはできませんよ？ついでに、あなたはまだ帰ってもいいけません。」

…な、なんだコイツ。

まさかさっきのは聞き間違えじゃなかったのか？

「なんで、自分に返してくれないんですか！？それは自分のものでしょう！？」

窃盗は犯罪なんだぞ！いけないんだぞ！

「この宝玉はフルドラゴンの宝玉ではなく、フルドラゴンに見た目がよくにているドラゴンの伝説種、ドルドラゴンの宝玉でした。そのため、この宝玉は一時こちらで預かります。しばらくしたらお返しいたしますのでご了承ください。」

なるほど、きちんと返してもらえるわけか。

うん、そこは素直に嬉しい、良かったと思う。

この宝玉は魅力の魔法でもかかってんじゃないかね？とか思っくらい手放したくないからね。

…だけどな、

「なんで、自分を帰してくれないんですか！？帰るぐらいいいじゃ

ないですか！自分は眠いんです！」

これはおかしいと思う。

自分に人権は無いのか？おう？そこどこだよ？

「あなたは、一応ドルドラゴンを討伐して、ドルドラゴンの宝玉を持ってきましたので、ギルド長が直々にお会いしたいと…。」

ギルド長に会えるってとっても名誉なことなんですよ？」

うん。うんうん。なるほどなるほど。

納得する…わけあるかああああ！！！！

「自分にはギルド長なんて毛ほども興味がありません。帰らせてください。」

自分をこんなイライラさせている奴に会いたくない。名誉なんざいらん。

そんなもんシュレッダーにかけてゴミ箱に突っ込む。

自分は眠いんだよ。分かるか？この気持ち。

限界まで疲労して、さらに眠気を我慢してイライラしているときに、待たされて。

ようやく解放かと思ったらさらに待てだあ？

ギルド長かなんだか知らねえが、調子に乗るのも大概にしろよクズが。

「興味があろうと無かろうと、あなたはギルド長に会わないといけないけません。」

一応、会わせろ、というのがギルド長の命令でして…。」

「分かりました。言い方を変えます。ギルド長が嫌いなので会いた

くないので帰ってもいいですか。」

うん、会ったことないけど嫌いだ。

多分顔を見た瞬間その顔を殴りとばすと思う。本気で豆腐の角に頭をぶつけて死ねばいいのに。

だいたいこのギルド長ってなんなの？

次の日にすればいいものをなんで今日にする？

帰らせろよ。なんで疲れてるってことも知らないの？

普通に考えたら伝説種と戦ったら疲れているって分かるだろ。

ギルド長死ね。氏ねじゃなくて死ね。」

「妾はどうやら嫌われとるようじゃのう。」

突然聞こえた声に、後ろを振り向くと、異常に光り物をたくさんつけてキラキラしている死ねばいい衣装を着た、まるで「自分は権力者ですよー、偉いんですよー」と言っているような死ねばいい笑顔をした幼女がいた。

ニヤニヤ笑いがキメエ。

「ふふ、驚いたかの？」

驚いてねえよ。

「妾こそがここのギルド長にしてこの国の最高権力者。

アンナ・フローリア・プラクト・テレアストなるぞ……！」

……いつもなら、ここで名前長いなコイツとか思ってるんだろうけど、今回はそんなことなく、ゆっくりと幼女に向かって歩いていく。

腕が届くくらいの距離まで近づくと、そして、

思いつきり、そいつの顔面を殴りとばした。

「あぶろばっ！」

きれいに弧をかいてとんでいくなんか名前長いギルド長に向かって一言。

「安心しろ…みねうちだ。」

「何がですかっ!?!」

第十六話 人をからかうなら仕返しされる覚悟を持て

思いつきりギルド長を殴り飛ばした。

…その筈なんだが。

「なぜだ？」

いつの間にか自分の前にまたいやがる。

一応、相手も女だし顔に傷をつけるのは流石に可愛いそうだから手加減したど…。

自分は少しだけが衝撃を解放したのだ。

今は顔を手で覆って痛みに耐えてゴロゴロと転がる醜い姿をニヤニヤしながら眺める筈だったのだが。

「なぜじゃ…？」

そんなことを考えているとギルド長がなにか呟いていた。

向こうが疑問に思うことなんて無いと思うのだが。

少し、ほんの少しだけ気になったので聞く。

「なにがだ？」

「む？なんじゃ？教えてほしいのか？ん？言うてみい、殴つてすみません、何でもしますから許してください。あなたに全て捧げますから、どんなことにも従う奴隷になりますから教えてくださいお願いします、とな。ほれほれ。」

……………。

…抑えろ、抑えるんだ自分。

ゆっくりと深呼吸するんだ、深呼吸。

深呼吸をして心をしずめるんだ。すー、はー。

「お？なんじゃ？覚悟を決めたか？妾の奴隷になる覚悟が。よし、
ばっちこいじゃ。」

大丈夫、大丈夫だ自分。まだ落ち着けるだろう？

頑張れ、無視を決め込むんだ。

そうだ。無視だ。こんなガキの相手している暇は自分には無いんだ。
大人の反応をするんだ。

よく考える。

今は宝玉を回収して宿のベッドで眠ることが最優先だ。よし。もう
少しだ。耐える自分。
大人になるんだ。

「なんじゃなんじゃ？言うならさっさと言ったほうがいいと思うぞ。
ほれ。大丈夫じゃ。そなたのような小柄な体躯のものでもしっかり
コキ使える場所もあるから安心するがいい。そなたのような平凡極
まりない顔でも、きちんと世の中のためになるのじゃ。

……ん？そのようなことは初めて聞いたというような顔をしておる
な。フム。そうなのか。じゃがしかし、今までそなたのように全く
世の中の為になっていないような奴でも頑張れば世の中のためにな
にかをすることもできるのじゃ。なんじゃ？感動したのか？まあ当
然の反応じゃ。役立たずのそなたが初めて人の役にたつことができ
ると分かったのじゃからな。さらに妾が言っておるのじゃ。感動す
るのが当然じゃろう。

妾のような立場のものがただの一般市民でしかないそなたに話しか
けているというだけでも感激して心臓が止まってもおかしくないと
いうのにさらに妾がその一般市民に助言をし、そして職の紹介まで
してやっておるのじゃ。家宝級のすばらしさじゃ。普通なら言葉も

交わすことのできない者に助言とは、妾の心は本当に広いのう。いやいや、いいことをしたあとは気持ちのいいものじゃのう。」

話がありえないほどずれている。なに自分で自分誉めてんだよ。コイツ。

「ああ、すまんすまん。つい話が長くなってしまったのう。

今回そなたに会いにきた理由は簡単じゃ。そなたをこの国、そして妾に仕えてもらおうと思つてのう。

兵士としてではなく奴隷としてでももちろん大丈夫じゃぞ？そのときはさすがに待遇などは代わるが、痛いのは初めだけなのじゃからな。」

「お前は自分に何をさせるつもりだ！」

ギルド長の言葉につい突っ込んでしまう。

しまった、反応してしまった。クツ、話が長すぎるからいけないんだ。

「なにつて、そんなことも分からんのか。まったく、近頃の子供は勉強をしていないのかのう。……まあ、そのことは気にしなくてよいぞ。とにかく妾の国に仕えるか？と聞いておるんじゃ」

「普通にイヤだが」

即座に拒否する。

なんでこんなやつの下で働かなきゃならんだ。大体、金はもう充分あるんだよ。

「む？なんでじゃ？」

……。

…… ああ、なるほど。大丈夫じゃぞ。そんなへんてこりんな色をしていても、いじめられたりすることはないぞ」

「上等だ。表出るクソガキ」

なにがああ、なるほどだ。

喧嘩売つてるとしか思えないんだが。

さつきから言いたい放題言いやがって。アア？

この髪と目は元々はきちんとした色だったんだよ！
なりたくてなったわけじゃねえぞ！

「むー？大丈夫じゃって、亜人やらも働いておるんじゃぞ。そなたは悪魔族のサキユバスに体系がにておるからの。きっとサキユバスと思われるじやろう。」

なんなら妾が言っておいてやってもよいぞ？」

よーし、今のは挑発だよな？

自分は喧嘩を売られたってことでいいんだよな。
よし、

「誰がサキユバスだおらあああつ！！！！」

思いつきり右手に力を入れてギルド長に殴りかかる。

流石に力を入れすぎたのか、少しかがまれるだけで回避される。
だが残念、そっちは囷だ。

かがんだギルド長の後頭部に左手をそえ、右足を少し引く。

…… 本命は、

左手の衝撃を開放、その衝撃でギルド長が前の方へ顔が傾く。

こっちだああああっ！！！！

その傾いた顔目掛けて、思いっきり膝打ちをする。もちろん衝撃のおまけつき。

もの凄い勢いでゴロゴロと転がっていくギルド長。しばらくして、その体が止まると、ぐったりとして動かなくなった。

まあ、怪我はしていないだろう。

自分は脳を揺らすように衝撃を使ったのだから、気絶しているだけだと思っ。

「あー、やばい。もう限界」

のた、のた、というゆっくりとした歩きでギルドの片隅においてあるソファーを目指す。いつもは人が座っているが、今日、ギルド長が来るって聞いてから、人払いをしていたらしい。そのため、ソファーは空席のまま置かれてある。とっている宿に行こうかと考えたが、ここから少し遠いため、つくまえに力尽きる。そう思うのでベツドは諦めてソファーに倒れ込む。

すぐさま襲ってくる眠気に抗うことはせず、自分の意識は沈んでいた。

第十七話 憎まれっこ世にはばかる

牢屋とは。罪人を閉じ込めておく所、という意味を持つらしい。そう、閉じ込めるのはあくまで罪人なんだ。そりゃあ冤罪……まあつまりは濡れ衣とかで捕まってしまつて牢屋に入る人もいるだろう。そのような罪の無いかわいそうな人はその牢屋の中や死刑になつたりして、疑問と怒りを覚えながら亡くなるのかもしれないし、きちんと無実が証明されて牢屋から出ることが出来る人もいるかもしれない。もちろん罪のあるのになぜか無罪になるような人も当然ながらいる。なんというか……、人が人を裁くのが必要なのは自分にはよく分らない、よく分らないんだ。でも、とにかくそういうことはやはり、すこし傲慢な感じがする。もちろんこういうのは自分の勝手な個人的意見であるんだけど、そこらへんは今置いておいて、やっぱり同族が同族を裁くつていうのは個人の意見も一人一人違つてくるだろうし、権力の強い人や大多数の意見に極普通の人がそう簡単に逆らうことができるわけがないから、やっぱりそういうのは完全に廃止、もしくはよほどのことがないかぎり長い間、凍結するべきだと自分は思う訳なんだよ。……さて、ここまで聞いたらすこしは思考できる脳があれば理解はできるはずだろう。ん？ここまで聞いてもみんなわからないつて顔をしているね。しかたないな。まったく、ちよつと考えれば簡単に分かることなだけだね。まあ、しかたがないから君達にも分かりやすいように説明してあげるよ。……あのね、自分は首に剣を突きつけるなんてことをされる覚えはないんだよ。もちろんそんな趣味もない。なぜ自分が牢屋に入っているか、なんてことは聞かないでおこう。自分は当然だけど無実、なんにもしていないからね。そう、自分はなにもしていないんだよ。だからさ、その剣をおろしてくれないかな。いや、おろしてくださいお願いします。

目が覚めたら知らない天井だったっていうのは転生によくあるテンプレだが、目が覚めたら椅子に縛りつけられていて知らない牢獄だったっていうのはあまり無いと思う。さらには首に剣を突きつけられているというおまけつき。何故自分がこんな“いかにも”牢獄という場所に閉じ込められているのかというと、つい先日殴り飛ばしたギルド長は、一応この国の王女だったってわけらしい。……普通に忘れてた。まあ、つまりは王女を、王族を殴り飛ばすなんてありえないほどの無礼を働いた自分は当然ながらこの牢獄に眠っている間に入れられた、というわけだそう。さらにはこの国には王、というかそんな感じのがギルド長以外ないらしく、面白いことに全ての権力がそのギルド長にあり、ギルド長がカラスは白い、と言ったら法律でカラスは白である、みたいなのが足されるほどの権力らしい。つまりはだ。国一つ分の権力が集中しているギルド長を自分は殴ってしまった訳だ。兵士曰わくこの時点で懲役98年はありえないほど相当軽い方らしい。ただし死刑はほぼ全くと云っていいほどないそう。でも、ギルド長が、懲役軽くして死刑にしようぜ、てきなことを言ったらしい。法律を一言でねじ曲げることのできるギルド長のことだ。自分を死刑囚にするのは造作もないことだろうな。権力乱用死ね。ついでにラダの野郎は自分と一緒にいた、ということで取り調べられたがEランクということに加え、自分に全ての罪をなすりつけたことで何の罰もなかったらしい。いや、お前は本当になにもしていないと思うけどとりあえず死ね。はあ……、今更後悔しても遅いな。うう、いっそのこと脱獄……、いや、簡単

に捕まりそうだな。むう、ならば……とか脱獄するための方法とかを考えてたら監視している兵士に声をかけられた。えっ！？ないと思うけどもしかしてこいつ心読めんの？とか思いながら内心ビクビクしている、

「王女陛下が貴様に話があるそうだ。くれぐれも無礼のないようにしろ。」

と首をかしげながら教えてくれた。

……ほう。王女陛下が直々に出迎えてくれるとは、コレハブレイノこれはしかえしナイヨウニシナイトナ。をしないといけないな

さて、さてさて、ギルド長よ武器へいしの貯蔵は十分か？

第十八話 娯楽

踏んでいる感覚では鉄製と思われる廊下を歩く。壁は少し見ただけだが、岩みたいなよく分からない鉱物だと思う。ちなみに現在の自分の格好は、ギルド長に危害を加えたりしないように手錠らしきものをつけられている。ついでに兵士に囲まれながら一緒に歩いていたりもする。前に一人、横に二人、後ろに二人だ。わーいはじめての逆ハーレムだー。まったく嬉しくないけどな！

というか今の自分のかっこうって美女とかだったら萌えるんだろうな。たぶん。まあ、自分は平凡顔だからそんなことはないだろうが……うむ……、拘束されて兵士に囲まれる美女。………おおう。どこの監禁プレイだよ、おい。

やっぱり拘束されているのが自分じゃなかったら兵士たちはさぞかし萌えていたんだろうな。

……あぶねえ。よくやった自分の平凡顔。ナイスだ平凡。いいぞ平凡。………。自分だって……好きでなつたわけじゃないんだよ……。

とか自爆している間もどんどん歩いている、のだが……、遠いな……。自分の歩幅を考えたとしても結構な距離を歩いているはずなんだが。んんー……？アレかな？自分（罪人）をどこに行くか分からないままたくさん歩かせて精神力と体力の両方を削って、抵抗する気力を無くそうぜ！ってことなのかな？

当たってたらおもしろいけど当たってないだろうね。きっと。ただ、この牢獄がとにかく広かったりするんだろう。とか、そんな考え事をしているあいだに、兵士たちが立ち止まる。そしてギイイイツという古い扉が軋むような音と共に神社の鳥居ほどの大きさの扉がゆっくりと軋みながら開く。そうして扉が完全に開くと、隣の兵士に「入れ」と短く命令されたので素直に従う。中に入ってみると、面会部屋にいる人は三人。一人はギルド長でもう二人は側近？とい

うか護衛だろう。残念ながら自分の今の状態ではギルド長に攻撃ができない。護衛の人の威圧感がハンパなすぎる。隙なんて全く見当たらない。……なるほど、こいつらが俗に言う精鋭か。

護衛の威圧に押されていると、ずっと黙っていたギルド長が口を開く。

「久しぶり、じゃのう。」

と言っても昨日ぶりじゃがな、とギルド長はコロコロと笑う。

その声を聞いたとたん、全身がこわばる。ありえないほどの緊張感。……恐らく、兵士の一人、いや、この部屋にいる自分とギルド長以外からの威圧。

くっ、こいつら、自分が攻撃しようとしたことにすぐ反応しやがった！

自分が少しでもおかしな行動を取れないように、全員が自然に武器に手をかけている。

少し動くだけで攻撃をしようとしてきている。

動けない状態で、そしてなぜかギルド長も動かない状態でそのまま沈黙が続く。

突然、ギルド長の近くにいた護衛が何かに気づいたかのようにギルド長に耳打ちする。

すると、先ほどまで真剣な顔をしていたギルド長の顔から、余裕たつぷりの笑みが浮かんでくる。

そしてその顔のまま、自分に一言。

「そなたは、魔女らしいのう」

「なっ！」

これは……マズい。

一瞬で公開処刑される可能性が急激に増えた。
そして今の自分の声もミスった。あんな驚愕の声をだすってことは肯定しているってことじゃねえか。

「……だったら、なんなんだ？」

必死で動揺を押し殺し、平静に見せる。

ここで動揺したら、相手の思う、つぼっ……！

「いや、なにもせぬよ」

………どうということだ？

ここで自分を処刑することでこの国の力はさらに上がるはずだが。

「ただ、ちょっとした余興に付き合ってもらうがな」

研究………か？

魔女の体を調べることで超力の秘密を暴くとか……。

「なあに、心配はいらぬよ。ただの一番強い奴を決めるためのトーナメントに参加してもらっただけじゃ」

それで、楽しもって訳か？

………よく分からんな。

「そのトーナメントは、現在テレアストの牢屋に入れられている罪人を戦わせる、という三年に一度の娯楽じゃよ」

………。

「商品として優勝者、準優勝者は釈放する。ただし勝利条件は相手の死亡及び気絶」

殺人は、ありなんだな……。

「ちなみに妾も参加する」

何故そんな危険な真似をするんだ？

「そして妾に勝利した者は兵士として城に仕えさせる」

……なるほど、罰ゲームじゃなくて人材確保か。

「そして妾に敗北した者は雑用、または奴隷として城に仕えさせる」
なるほど、イジメというか追い討ちというか。

「さて、このテレアストの罪人が戦うトーナメント、名付けて罪人トーナメントは三日後に開始される。それまで体調を崩さぬようにな」

そう言つて、ギルド長は立ち上がり、護衛と部屋を出ていった。

自分はいえ、兵士の威圧がなくなり、ようやく、考えをまとめることができた。

「三日後、ねえ」

とりあえず、その日が来ないことを祈っていよう。

第十九話 予選前（前書き）

三人称に挑戦（7/7 書き直し）
駄文にご注意ください。

第十九話 予選前

雲一つない空に浮かぶ数千もの風船。大きなものは子供ほどの大きさで、小さなものは拳大の大きさと、大小様々な風船が空を舞う。また、色の種類も豊富で、赤色から緑色、はたまた黒色までと、色とりどりの風船が空を埋め尽くしている。

街はいつも以上の活気を見せ、屋台を出していたり、たくさんの旅人が立ち寄っていたりと、かなりの賑わいを見せる。

どうして今日はこんなにもこの街『テレアスト』が賑わっているかというと、この国の女王である、アンナ・フローリア・プラクト・テレアストが、『娯楽が足りない』と、18年ほど前に開催した、罪人たちを競わせる、という遊びが、3年に1度という頻度で未だに続いているのである。

そして現在は『罪人トーナメント』と名を改め、この国のお祭りの一つとなっているのであった。

祭りの開催まであと数十分といったところであろうか。

出場者が待機している場所を覗くと、その罪人たちの中でも一際目立つ罪人が。

白い髪を肩まで垂らし、右目は白く、左目は黒く、虚脱感をその目に宿す、なんと五歳ほどの少女であった。

名を色波葉家。伝説種の竜でさえ倒すことのできる、ベテランの冒険者である。

なぜベテランの冒険者がここにいるかは割合するが、その強さ故、隠れた優勝候補の一角である。

しかし、やはりその外見の幼さ故にそれほどの強さに見えないのだろうか、一人の罪人にかかわれている。

「なあ、嬢ちゃん。知ってるか？このお祭りは毎回死人が数人であるだってよ。もしかしたら嬢ちゃんもその数人に入るかもなあ」

しかし、当然の如くその罪人を無視して彼女は虚空を見つめている。
その態度に腹を立てたのか、

「なんとか言えよ嬢ちゃん！」

と、叫びながら彼女に殴りかかるうとした、が。

「うるせえ」

その罪人の腕を軽々とよけると、その罪人の方に体を向け、

「今なんか鬱だから静かにしろ」

と言うと、蹴りをその罪人の腹に叩き込んだ。

その直後、罪人の悲鳴が部屋に響きわたった。

見てみると外傷は存在していないが、どうやら気絶しているらしく、
口から白い泡を出している。

そんな罪人を横目に見ながら、彼女はやはり虚空に向かって一言。

「ていうか自分はもう16だ」

場所もかわって、ここは大きな広場。

元は公園だったのか、砂場があり、一部芝の生えていない場所がち

らほらと見かけられる。

そして演説をするための台と、台から少し離れたところに、トーナメント用と思われる正方形の岩を敷き詰めた、一辺100メートルほどのステージがある。

演説用の台に立つのは、この国の女王と、その護衛と思われる人物。集まっている人々は、いつ始まるのかと騒いでいる。

女王が騒いでいる人々を見渡し、口を開くと、今まで騒がしかった広場は一切の音がしなくなる。

「さて、長い話は妾も面倒じゃから簡単に言おう。」

女王の声が響くと、人々はその声を、一切の動作を、聞き逃すまい、見逃すまいと、必死に耳をすませ、目を皿のようにさせる。

そして、女王はゆっくりと周囲を再度確認した後、

「これより！罪人トーナメントの開催を宣言する！！」

女王が大きく息を吸って放った言葉に、人々は歓声をあげ、罪人は笑い、そして女王は楽しそうな表情をする。

しかし、笑う罪人たちの中で笑うことなく、むしろ不機嫌になっている罪人が。

色波葉家という少女である。

彼女は、トーナメントの予選会場へと向かいながら、ブツブツとなにかを呟いている。

彼女が先ほどまでいた出場者たちが集まる場所にある、無傷ながらも気絶している罪人たちの山を見れば、不機嫌な理由も分かるかもしれない。

女王が台から降りると、入れ替わりで一人の兵士が台に登る。

そして、登りきり、罪人全てが予選会場に行つたと確認すると、大きく息を吸い込み、

「簡単にルール説明をする。

予選を突破する方法は簡単だ。

全ての罪人が一箇所に集められるから、そこから残り10人になるまで生き残ればいい。

場外、死亡、気絶することで失格とされ、脱落することになる。

あ、あと武器の使用とかはアリだ。

当然だが魔法もな。

あと他は……、

……めんどうだから、予選開始！」

予選会場にいる罪人にそう言つと、雑だぞーなどのヤジを無視しながらさつと降りていく。

どうやら今の言葉で予選が始まつたようだ。

一部の罪人たちが雄叫びをあげながら潰しあっている。

当然だが、弱そうだと見て彼女に襲いかかるものもいた。

そうして近づいた罪人に彼女は言う。

「さて、こういうバトルロワイヤル方式には様々な戦い方をする奴がいる。

強そうな奴を数人で倒そうとする奴や、とにかく突っ込む奴、何もせずに状況を見る奴。そして弱そうな奴を狙う奴だ。他にもいろいろあるだろうが、お前はきっと自分が弱そうと見て襲いかかつてきてるんだろう。

……脳みそ使えよバカが。自分はもうすでに予選が始まる前から絡まれてただろうが。

そしてそいつらが今ここに見当たらないってことは、

……どういふことだろうなア
「！」

第二十話 予選終了（前書き）

いつも通り、駄文にご注意を。

第二十話 予選終了

向かってくるバカ共をちぎっては投げちぎっては投げ。
あつという間に自分の周りに人がいなくなった。

あと何人いるかな……。ひい、ふう、みい……。うおおっ！？

「ちょ、数えてる途中で攻撃すんじゃないねえ！」

岩を落とす魔法を放ってきたやつの方へ体を向け、思いっきり地面を蹴る。

20メートルぐらいの距離が一気につまる。そしてそれに驚く魔法を使ってきたやつ。

……。おい、お前さっきまで自分見てたろ。なんで驚く。速いって分かってたろ。音速なめんな。

面倒なのでここで思考を放棄。慌てたように詠唱を始めるアホに殴りかかれよ、と呆れつつ腹を殴る。

それだけでアホは空を舞い、場外へ。

ふう、さてあと何人……。

……。やれやれ、なんで自分が数えようとするのと攻撃がくるのかねえ。竜巻を起こす魔法つてオイ。高さ普通に発生する竜巻ぐらいあるし、横いっぱいまで広がってるし。

そして不意打ちだったからもうジャンプしようがどうあがこうがかわせない距離。

なんで罪人のくせに、あきらかに上級の魔法使ってたよ。自然災害とか無理。どうにもできない。

……。でも、さすがに、ここまできて負けるのは嫌だしな。

……左目に意識を集中。

修行みたいなかんじで使わないようにしてたんだが。

……作成完了。右目に意識を集中。

竜巻を吹き飛ばせるほどの衝撃なんてもってる訳ないし。

……付与完了。

あーあ、痛いのは嫌なだけだな。

足元に出現させたうまい棒が形状を変える。

個体から、スライムのような粘度をもったゼリー状へと。

竜巻はもうあとコンマ数秒でやってくる位置までせまってきている。

……ああ、大丈夫。準備はギリギリ完了した。成功するといいけどっ！？

巻き上げられる、というより押しつぶされそうなほどの衝撃。

あれ？これ自分死ぬんじゃない？体ちぎれるんじゃない？

体が竜巻によって上へ行こうとするのをうまい棒が阻止する。

そう。付与した能力は『15秒間けっして離れず接着し続ける』というもの。つまりは時間制限付きの異常なまでに強力な瞬間接着剤だ。

接着時間はうまい棒を複数作成すればどうにかなるが気絶してしまふと失格なので、けっこう頑張っていたりする。

他の参加者も飛んでくるから怖い。ぶつかりそうだし。

というかそろそろ本気でやばいです。ちぎれる。とくに足。

……おう？

竜巻が止まった。接着時間残り2秒。危ない危ない。そして向こうからは「やったか!？」という声。

ついでに、いい感じに砂埃が上がっている。

敵生存フラグ作成ありがとうございます。

それで自分を倒したと勘違いしたのか、奴らは他の奴との戦闘を再開。

砂埃がゆつくりと晴れてくる。

そして向こうからは「バカな!？」「ありえない!!」などという声が。

そりゃあ竜巻くらっても平気だったら怖えよな。自分だって怖いわ。つーか引く。自分の体のスペックに引いてる。なにこれ。自分で自分が怖え。

「くそっ、まずは全員でアイツを倒せえっ!」

うわ、ちょ、うわー。

かわい女の子に、よってたかって危害を加えようとするとかないわー。

そして全員それに賛成とか。

「なにそれひどい」

なんかたくさん襲いかかってきた。

自分の戦い方は一対一用なんですけどー。

「とっつ」

とりあえず一番場外に近いつぱかった奴を狙い、ドロップキック。悲鳴をあげながら蹴った奴が場外へ落ちる。

フン。アホなことをしようとするから天罰が当たったのだよ。ざまあ。

さて、次はどいつにしようかな……。

『そこまでっっ！！』

ふへ？

『残っている人数が10人になりましたので予選終了です』

……チツ。

せつかくこれから奴らに弱い者いじめした天罰を与えようかと思ったのに。

『残った者達は速やかに選手控え室へと移動してください』

どこだよそこ。聞いてねえよ。知らねえよ。

あ、でも他の奴らについて行けばいいか、とか思って見てみると、残った奴らは談笑しながら歩いていつてる。

おい、お前達さっきまで自分に怯えてただろうが。なに復活してんだよ。

……なんだこの疎外感。

速く控え室に着かないかな。

第二十話 予選終了（後書き）

補足？

「バカな!？」 竜巻出した人

「ありえない!!」 ドロップキックされた人

第二十一話 一回戦（前書き）

駄文です。ご注意を。

第二十一話 一回戦

一人寂しく、楽しそうに談笑している奴らの後ろについて歩く。

幸い、控え室には5分程で着いたが……

それでも楽しそうにまだ話し続けている。

なんで控え室に全員集められてんだよ。

普通個室とかじゃないのかよ。

あ、罪人だからですか、そうですか。

……一人つてのは辛いけど、目の前でこう、楽しそうにお話とかされてると、ねえ？

ああ、なるほど、対戦相手を確認しとけてことか。

きつとこれは神様が与えてくれた時間に違いない。

という訳で第一回戦の相手は……。

うわあい。さつき竜巻で攻撃してくれた人じゃないか。嬉しいな。

深めにフードを被っているから顔は確認できないが、他の人達より

も頭一つ分小さい。やーいチビ。

え？自分が言える立場じゃない？

……え？いや。ね？ほら、ここは自分は数えないって感じで、うん。

……ちくしょう。

き、気を取り直して、他にいるのは……。

- ・斧を担いでいた巨漢。
- ・剣を持っている細身の男。
- ・体中に入れ墨のように文字を彫っている男。
- ・上半身裸の筋肉だるま。
- ・全身鎧姿の人間。
- ・妙にポケットが多い服を着た優男。

- ・波動的なのを使っていたオッサン。
- ・地味に浮いている頭を丸めた男。

なんというラインナップ。もう帰りたい。

斧を持つてる奴と剣を持つてる奴はこの中では一見普通っぽいけど、斧を持つてる奴の方は身長が3メートルよりでかい。剣を持つてる方なんて10人ぐらい余裕で相手していたぞ。しかも相手の武器を斬るなんてこともしてたし。

全身鎧が可愛く見えるわ。まあ、鎧の人魔法無効化してましたけどね。

しかもあの竜巻を。だから飛ばされてないんだろうね。無効化というより自分の体を別の空間に隔離ってかんじだったけど。え？他の奴ら？余裕でよけてたよ。

……なんでそんな強いのに提案にのつたんだよてめえら。ちなみに自分がドロップキックをした奴は小さめのナイフで戦っていた。それだけ。

なんでそいつを倒したんだよ自分。でもやってしまったことは仕方ないし、諦める。諦めたくないけど。

……お？係員がトーナメントの説明をしている。まとめると、このトーナメントは、とりあえず始めに普通に10人でトーナメント。

当然だが残り5人の時は一人シードである。

ちなみに準決勝（残り3人）でギルド長が乱入。

4人でトーナメント、という訳。

つまりは3勝か4勝したらいい、という訳。

うわーい、余裕余裕。とっても簡単。

………はあ。

ああ、何故自分はこんなところに立っているんだろう。

一回戦が始まるというから指定された場所に來ただけなのに。

砂漠である。なぜか砂漠である。太陽光が痛い。シミができるじゃないか。まったく。

あ、いや、そんなことは関係ない。いや氣になるけど。関係ない。関係ない。

それよりステージが砂漠ってなんだ。嫌がらせか。嫌がらせなのか。コノヤロウ。

あ、喉かわいてきた。水飲みたい。

『始めっ！』

いつの間にか試合が始まってたっ！！

遠くに見えるロープのチビに向かって駆け出す。

走りにくい。砂に足がとられる。

うおっ！あいつ水だしてやがる！卑怯な！

……自分にも、

「よこせっー！」

大きくジャンプ。跳ぶ瞬間に衝撃を足で解放することは忘れない。

このぐらいの速度ならロープのチビの近くに着地できそうだ。

……んー、あれ？ なんだか水を圧縮し始めていませんか？

あ、こっちに右手を向けた。

そして発射される水のレーザー。それを少しだけ体を捻ることにより回避。おお、跳んでる最中なのにかわせた。

そして体制が微妙に崩れたところで左手を向けられる。

そして出てきたのは、大量の水でできた針。

かわせないようにするためなのか、妙に数が多い。

あ、飛んできた。

水の針が体に当たるたびに金属同士がこすれあうような甲高い音がする。

なにこれ痛い。

しかし残念。自分の体には一本も針が刺さっていない。

さすがにこれは予想外だったらしく、ロープのチビは驚いて動けない状態になっている。

まあチクチクするんですけどね。

「その程度の針に刺さるほど柔な鍛えかたされてねえよ。」

空中に浮かんだまま前に半回転。やればできるものである。

そして回転の勢いにまかせてロープのフードに向かって踵落とし。

確かな感触。そしてうめき声。

普通に着地してから、とどめをさすため足を振り上げ、

『そこまでっ！！』

おろそうとして、止める。

まあ予想通り。

気絶してるが、怪我もしてないだろ。フード妙にかたかったし。

『カターイ・ロープ選手の敗北です!』

勝者の名前は出さないのね。あと名前がおかしい。

かたいローブってなんだ。たしかにかたかったけど。

まあ、いいや。それよりはやくここから移動せねば。日射病になっ
てしまう。

と、歩きだそうとしたところで、

「うおおっ!」

急に地面に穴があいた。

第二十二話 観戦（前書き）

駄文にご注意を。

第二十二話 観戦

穴の先は控え室だった。

…… なんか、納得いかねえ。

…… さて、自分対ローブ野郎との試合が終わって、穴に落ちて控え室に戻ってみれば、二人ほど人数が足りなかった。

斧の人と剣の人だ。

どうやら二回戦が始まるようで、控え室のテレビがついた。テレビってあつたのかよ……。

そして、そこにはステージに立つ斧の人と剣の人が。

おい、待て。なんであいつらは普通のステージなんだ。

日も照っていないし、足場も悪くないじゃないか。

運営め、この仕打ちは忘れんぞ……っ！

とかアホなことを考えているうちに、試合が始まっていた。

まずはお互い相手の力量を探るようにじっと見つめ合っている。

…… なんかキモいな。両方筋肉質なオッサンだし。

沈黙に耐えかねたのか、斧の人が斧を振り上げ、勢いよく地面に叩きつける。

ん？そこから振り下ろしても当たる訳がないんだが？

…… どうやら、そんなことはなかったようだ。

衝撃波か何か知らないが、そのような物が剣の人に向かっていく。

しかし、剣の人はそれを剣を振るうだけでかき消し、衝撃波に隠れて正面から近づいてきた斧の人の斧を、剣を持っていない左手で横から叩きつけて左に逸らす。

これで斧の人に少しだけすきができる。

当然、これを逃すような剣の人ではなく。

また、当然このすきをつかれるような斧の人ではなく。

結果、斧の人は左手を犠牲に致命傷を逃れた。

犠牲した左手の傷は深くはないが、恐らくこの試合では使えないだろう。

斧の人はすぐさま両手で持っていた斧を右手に持ち替え、斧で一閃。それに反応した剣の人は上体を逸らすことでギリギリでかわし、逸らした勢いのままバック転することの後ろに下がる。

瞬間、剣の人に襲いかかる雷。

恐らく初級魔法だからせいぜいが動きを止める程度だろう。

だが、場外に出すのは数秒止めるだけで充分すぎる時間だ。

雷の属性の特徴は威力の強さ、麻痺など多々あるが、ここで注目されるのは速さ。

光の属性に次ぐ速さで、秒速150キロメートルと、まず捉えることができない速度を持ちながら、一定以上の電圧の場合、筋肉を収縮させる効果があるという属性。

そして、その捉えることすら出来る筈のない雷を、剣の人はよけた。

湧き上がる歓声。

……おい、自分の時はこんななかったぞ。

軽い嫉妬を覚えるが、スルー。

……いいんだよ。次の試合で貰えれば。

そんなことを考えているうちに一瞬で剣の人は斧の人の目の前に移動。

剣の柄で水月をつき、斧の人を場外へ吹っ飛ばす。

……おかしいな、自分の試合では場外なんてなかったんだが。

『そこまでッ！』

という放送の人の声で思考を止める。

大丈夫だ。きっと次は普通だ……よ、ね？

『キヨ・カーン選手の敗北です!』

突っ込んだら負けだ。突っ込んだら負けだ。

名前が……っ、そのまますぎる……っ!

……はっ! つい突っ込んでしまった。

おのれ孔明……っ!

とかバカなことを思っていると、剣の人々が控え室に戻ってくるのが見えた。

穴あけるよ! 自分だけ穴に落としてんじゃねえよ!

本当にやめるよそっいうの。

しまいにや泣くぞ。外見年齢5歳で精神年齢16歳が泣くぞ。

……なんか妙に突っ込むのも、考えることも面倒になってきたので、少しだけ眠ることにする。

べ、別に、急に自分がアホみたいに思えたからとかじゃないんだからなっ!

勘違いするなよっ!

……。胃液が、逆流してるだど……?

おえっ、気持ち悪い。

……次の試合こそは普通のステージでありますようにッ!!

第二十三話 嫉妬（前書き）

久しぶりに書くと妙な文章に……。
今回も駄文にご注意ください。

第二十三話 嫉妬

肩を揺らされている感覚がある。

ああ、眠たいんだから少しぐらい眠らせろよ。
そう思いながら薄く目を開く。

戦場だった。

……え？

混乱しながらよく見てみると、どうやら戦場を模したステージらしかった。

起こしてくれた係員（？）に礼を言ってから、とりあえず立ち上がる。係員（？）はお辞儀をした後に消えた。

……さて。どうやら自分は他の人達の試合を見逃してしまったようだ。

まあ、不戦敗にならなかっただけかもしれませんだと思おう。

試合の相手は……どうやら剣の人のようだ。

あれー？あんなのどうやって倒せてんだ？

自分の今の最高速度でも音速を超えるぐらいだぞ？それでも充分すぎるだらうけど。

でもさ？雷速をかわせる人間だぞ？どう攻撃を当てられてんだ。いやマジで。

かくなる上は……

『試合開始！』

って始まるの早くなっ！？

相手をじつと見つめる。むっ、さっきからひしひしと殺気が伝わってくるから怖いんだが。これ足震えてんじゃないかね？つてぐらい怖い。じつとしてるのもアレなんで、ゆっくりと膝を曲げていく。徐々につくられるクラウチングスタートの姿勢。

「よいい、ドン、ってね」

十数メートルはあった距離をほぼ一瞬で詰め、相手の背後に周り、殴る。

しかしそれはかがまれ、かわされる。

お返しとばかりに繰り出される足払いを、すねを蹴ることにより相殺。それに隠れるようにして出てきた剣ごと剣の人を蹴り飛ばす。そのまま追撃しようとするが、空中で既に攻撃できる体制に整えられてるため断念。着地のすきを狙うようにする。

着地する寸前に飛びかかるが、体の軸をずらすようにしてよけられる。……なにこいつマジ面倒くせえ。

殴りかかった後にできたすきを狙われる。それを体全体を動かしてかわす。

……技術と経験は圧倒的に負けている、身体能力は圧倒的に勝っているが。

これは、結構きつい。今まで戦ってきたのは魔物だしな。あいつらは力任せな戦い方だったし。人間相手は経験はほとんど無いしな。

……さて、どうしよう。

まあ、答えは一つしか無いよな？

「面倒だし、見て、当てようか」

すきを探す。どんな達人でもすきは必ずある……等。

幸い、剣の人が振るう剣は全然見えるから大丈夫だろう。
すきを作らせようか。

準備も無く、ただまっすぐに剣の人につっこむ。

剣の人は的確にカウンターを合わせられる位置に剣をもっていく。
さらに攻撃をかわしやすい位置に移動、か。

まっすぐ突っ込む。当然、剣の人のカウンターが自分に炸裂し……

……剣を、はじいた。

……ほら、できた。

剣の人の頭を掴む……のは出来ないので頭に手を乗せる。

「終、了」

衝撃を解放し、脳を揺らした。

『ツ・ルギ選手の敗北です！』

いいかげんにしろオツ！

なんで、名前がそのままなんだよ！

固いローブに巨漢に剣ってオイィツ！

もつとましな名前ないのか！

……もうやだ。帰りたい。本当に疲れた。

今の試合で結構衝撃解放したからな……。残りが少ない。作用反作用の法則？んな繊細なことできるかっ！
すねを蹴るのと、体ごと蹴るのと剣をはじくのと動かないように足

からだすのと。

強すぎる。剣の人ちよつと強すぎる。

もう寝る。え？次の試合？いいよ、見なくて、面倒だし。
あー、だるい。

次は楽な試合だといいな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7224p/>

おかしな魔眼？と異なる世界

2011年8月30日22時02分発行